

心理臨床専攻修士課程 開講科目 □臨床心理基礎必修科目

科目名	臨床心理学特論	4 単位
担当者	福元 理英（前期）、小松原 智子（後期）	
テーマ	臨床心理学の領域と実践	
科目のねらい	<p><キーワード> 臨床心理学、臨床心理学面接、臨床心理学査定、臨床心理学的地域援助、心理臨床における倫理</p> <p><内容の要約> 心理臨床の実践に入る前に、心理臨床の基礎としての理論および実践領域における実態について学ぶ</p> <p><学習目標> 臨床心理学の多様な理論・領域について、基本的な理解ができる。 臨床心理学の主たる領域の実践における基本的態度が理解できる。</p>	
	<p>前期は、福元が担当し、専門家としての職責・基本姿勢と心理面接を行う上での枠組み、対象理解および援助法について広く学んでいく。またレポート発表や具体的事例を通して、臨床実践および連携の方法について理解を深める。</p> <p>後期は、小松原が担当し、臨床心理学の基礎知識について論文や事例、ワークの体験を通して理解を深める。また、ライフサイクルにおける心理支援の視点や臨床家としてのセルフケア、専門家としての職責・倫理についても理解を深める。</p> <p>前期</p> <p>第 1.2 回 専門家としての基本姿勢と心理面接における枠組み 第 3.4 回 インテーク面接（生育歴等の情報収集・観察・発達検査ほか） 第 5.6 回 心理療法①精神分析・力動的心理療法 第 7.8 回 心理療法②行動理論・認知行動療法・応用行動分析 第 9.10 回 心理療法③遊戯療法 第 11.12 回 心理療法④集団療法 第 13.14 回 心理療法⑤芸術療法 第 15 回 まとめ</p> <p>後期</p> <p>第 1～3 回 心理療法の基礎：人間性心理学（パーソン・センタード・アプローチ） 第 4～6 回 心理療法の基礎：フォーカシング指向心理療法（体験プロセス） 第 7.8 回 非言語・イメージを用いた支援（描画・箱庭） 第 9.10 回 ライフサイクルから考える心理的支援 第 11.12 回 産業・司法領域における心理臨床 第 13.14 回 臨床心理学における専門家としての職責・倫理、セルフケア 第 15 回 まとめ</p>	
事前学習の内容 学習上の注意	発達心理学、青年心理学、社会心理学、学習心理学、乳幼児心理学、老年心理学などの臨床心理学の基礎となる理論や知見に関する知識を前提として講義する。	
本科目の関連科目	臨床心理面接特論Ⅰ・Ⅱ、臨床心理査定演習Ⅰ・Ⅱ、心理療法特論、臨床心理基礎実習、臨床心理実習Ⅰ - ①②	
テキスト	使用しない	
参考文献	<p>古賀靖彦編『現代精神分析基礎講座』金剛出版、2018 松本真理子・森田美弥子編『心理アセスメント 心理検査のミニマム・エッセンス』ナカニシヤ出版、2018 井上雅彦監修『保護者と先生のための応用行動分析入門ハンドブック』金剛出版、2019 村瀬嘉代子監修『学校が求めるスクールカウンセラー』遠見書房、2013 福島哲夫、尾久裕紀ら（編）『公認心理師必携テキスト』改訂第2版 学研メディカル秀潤社、2020 池見陽『傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング』ナカニシヤ出版、2016 L.ラパポート『フォーカシング指向アートセラピー』誠心書房、2009 ドラ・M. カルフ・山中康裕監訳『カルフ箱庭療法入門 新版』誠信書房、1999 乾吉佑『働く人と組織のためのこころの支援』遠見書房、2011 R.S.ラザラス、S.フォルクマン『ストレスの心理学』実務教育出版、1996 上田琢哉『カウンセリングを倫理的に考える』岩崎学術出版社4、2022</p>	
成績評価 方法と基準	授業態度・議論への参加・レポート等の平常点を総合して評価する（100%）。 全体で60%以上を合格とする。	

科目名	臨床心理面接特論Ⅰ（心理支援に関する理論と実践）	2単位
担当者	小松原 智子	
テーマ	臨床心理面接の基礎を学ぶ	
科目のねらい	<p><キーワード> 臨床心理面接、面接技法、受理面接、見立てと方針、治療構造、親子面接、遊戯療法</p> <p><内容の要約> 「臨床心理面接特論Ⅰ」は1年次前期開講の必須科目である。この授業では、心理専門職の業務のひとつである臨床心理面接について、理論とその背景、基本的態度、受理面接、見立てと方針など成人や子どもの心理面接で必要となる臨床的な考え方や姿勢を学ぶ。</p> <p><学習目標> 心理面接の理論と技法、および基本的考え方と姿勢を理解し説明することができる。 クライアントの特性や水準に応じた支援やさまざまな状況への対応を学び、適用できる。心理面接を行う上での原則や倫理的諸問題を理解し説明することができる。</p>	
授業の進め方	<p>授業では臨床心理面接の理論と実践について理解を深めるために、講義、各テーマに関する発表とディスカッション、事例検討などを行う。</p> <p>第1回 心理面接の理論とその歴史的背景 第2回 心理面接の学び 研修、記録、SV、事例検討 第3回 心理面接の実践 基本的態度と応答、治療的距離、面接構造 第4回 心理面接の実践 受理面接 第5回 心理面接の実践 見立てと方針 第6回 心理面接の実践 引継ぎ、終結、中断 第7回 心理面接の実践問題 枠の守りと揺れ、危機対応 第8回 セラピストの内的反応との向き合い方 第9回 心理面接の実践問題 アセスメントの視点 第10回 親子面接の実践 受理面接 親面接や親子面接の目的と対応 第11回 親子面接の実践 子ども・親・家族面接の構造とセラピスト間の協働 親子面接の実践問題 親や子どもの気持ちを聴き、問いに応える 第12回 遊戯療法の理論 遊戯療法における遊び 第13回 遊戯療法の実践 見立てと方針、終結と中断 第14回 遊戯療法の実践問題 受容と制限、枠の守りと揺れ 第15回 まとめ</p>	
事前学習の内容 学習上の注意	臨床心理学の基本的な知識を前提として、心理面接の実践を学ぶ。積極的なディスカッション、質疑、文献購読などで理解を補充し、学びを深めること。	
本科目の 関連科目	臨床心理面接特論Ⅱ、臨床心理学特論、心理療法特論、臨床心理基礎実習、臨床心理実習Ⅰ—①②	
テキスト	使用しない。適宜授業内で資料を配布する。	
参考文献	<p>関連文献は授業内で適宜紹介、解説する。</p> <p>鑪幹八郎・名島潤慈（2018）『心理臨床家の手引 [第4版]』誠信書房 一丸藤太郎・山本力他（1998）『精神分析的な心理療法の手引き』誠信書房 竹内健児（2015）『Q&Aで学ぶ 心理療法の考え方・進め方』創元社 下山晴彦・伊藤良子・大塚義孝他（2003-2004）『臨床心理面接技法1～3』誠信書房 河合俊雄（2000）『心理臨床の基礎2 心理臨床の理論』岩波書店 田中康裕（2017）『心理療法の未来』創元社 津川律子（2020）『改訂増補 精神科臨床における心理アセスメント入門』金剛出版 渡辺雄三（2011）『私説・臨床心理学の方法—いかにクライアントを理解し、手助けするか』金剛出版 松木邦裕（2016）『改訂増補 私説 対象関係論的心理療法入門—精神分析的アプローチのすすめ』金剛出版 小俣和義（2006）『親子面接のすすめ方—子どもと親をつなぐ心理臨床』金剛出版 竹内健児（2019）『Q & Aで学ぶ 遊戯療法と親面接の考え方・進め方』創元社 鮎田典子（1999）『遊戯法（プレイセラピー）—子どもの心理臨床入門』新曜社 大野木嗣子（2019）『はじめてのプレイセラピー: 効果的な支援のための基礎と技法』誠信書房 丹明彦（2019）『プレイセラピー入門—未来へと希望をつなぐアプローチ』遠見書房</p>	
成績評価 方法と基準	課題レポート・発表（60%）や討論など授業への取り組み姿勢（40%）により評価し、全体で60%以上を合格とする。	

科目名	臨床心理面接特論Ⅱ	2単位
担当者	吉野 真紀	
テーマ	臨床心理面接の実践を学ぶ	
科目のねらい	<p><キーワード> 臨床心理面接、臨床心理アセスメント、クライアント—セラピスト関係、セラピストの資質、クライアント理解</p> <p><内容の要約> 心理臨床の専門業務のひとつである臨床心理面接について、面接に求められるセラピストの資質とさまざまな面接技法、クライアント—セラピスト関係、クライアントの心的世界の理解や見立てなど、その実践について学ぶ。</p> <p><学習目標> 臨床心理面接の実践における基本的知識・態度および専門的資質を修得できる。セラピストとしての自分の特徴に気づき、臨床心理面接に活かすことができる。心理臨床に携わる専門家としてもつべき覚悟について理解できる。</p>	
授業の進め方	<p>授業は講義およびワークやロールプレイやディスカッションを取り入れながら、専門的知識や技術を知的に理解するとともに体験的に習得する。臨床心理面接の実践につながるよう理解を深める。</p> <p>第1回 臨床心理面接に求められるセラピストの資質 第2回 臨床心理面接における現象と投影（観察と想像）の区別 第3回 臨床心理面接における心的現実 第4回 臨床心理面接におけるイメージ、表現 第5回 臨床心理面接における身体性・関係性 第6回 臨床心理面接における象徴的理解、対話 第7～14回 さまざまな臨床面接技法と臨床実践例を学ぶ 第15回 振り返り・まとめ</p>	
事前学習の内容 学習上の注意	<p>○参考文献に挙げた図書を自習すること。 ○授業で学んだことや感じたことは、授業後忘れないうちに書き留めておくこと。 ○知識として頭で理解するだけでなく、自身の体験をもって深く学ぶ姿勢で臨んでほしい。</p>	
本科目の関連科目	臨床心理面接特論Ⅰ、臨床心理学特論、心理療法特論、臨床心理実習Ⅰ	
テキスト	使用しない。適宜レジュメを配布する。	
参考文献	<p>東山紘久『遊戯療法の世界』創元社、1982 池見陽『心のメッセージを聴く—実感が語る心理学』講談社現代新書、1995 倉戸ヨシヤ『ゲシュタルト療法—その理論と心理臨床例』駿河台出版、2011 河合隼雄『心理療法序説』岩波書店、1992 河合隼雄『こころの最終講義』新潮社、2013 織田尚生『心理療法と想像力』誠信書房、1998</p>	
成績評価 方法と基準	評価方法は、授業への参加度や課題等への取り組み姿勢（主体的・積極的）70%、レポート30%で評価し、総合評価60点以上を合格とする。なお、2/3以上の出席がない場合は評価の対象とならない。	

科目名	臨床心理査定演習Ⅰ（心理的アセスメントに関する理論と実践）	2単位
担当者	辻野 達也	
テーマ	心理検査を通して、被験者の心理的問題を含む行動や性格傾向を理解する。	
科目のねらい	<p><キーワード> 臨床心理査定, 心理検査, 援助計画</p> <p><内容の要約> 臨床心理査定は、臨床心理面接と同様に心理職（公認心理師、臨床心理士）の職務のひとつであり、その目的は援助対象者の行動特性や性格傾向をトータルに把握し、支援に役立てることである。 本演習では、臨床心理査定における主に心理検査について、実施法や結果の処理、解釈を学び、被験者への援助方策や計画を立てることができるようになることを目指す。また、心理検査をおこなう上での倫理的事項についても学ぶ。</p> <p><学習目標> ・さまざまな心理検査についての専門的知識・技法を習得し、主たる心理検査の実施、結果の処理、解釈、報告ができる ・心理検査を通して、クライアントの抱える心理的問題を見立て、適切な援助方策や計画を立てることができる。 ・心理検査をおこなう上での倫理的諸問題を理解することができる。</p>	
授業の進め方	<p>乳幼児から高齢までのさまざまな人々を対象に、知的側面、発達の側面、性格面、認知心理的側面の査定について代表的な心理検査の理論と実際を、演習を通じて学ぶ。</p> <p>第1回 オリエンテーション 第2回 臨床領域と査定、検査の導入とテストバッテリー 第3～6回 投映法（描画検査：バウムテスト・風景構成法） 第7～8回 投映法（描画検査：人物画・家族画、SCT、P-Fスタディ） 第9～12回 知能検査法（WISC） 第13～14回 質問紙法（Y-G検査、MMPI、その他） 第15回 発達障害と心理査定（AQ、PARS-TR、ADI-R、その他）</p>	
事前学習の内容 学習上の注意	各検査の実施法や解釈法を習得するために、授業以外や授業期間後も自主学習に努めること。	
本科目の関連科目	臨床心理査定演習Ⅱ、投映法特論	
テキスト	授業内で資料を配布する。	
参考文献	<p>内容が多岐にわたるため、必要な文献は授業内で適宜紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・A・プリフィテラ他編（2012）『WISC - IVの臨床的利用と解釈』日本文化科学社 ・E・O・リヒテンバーガー他（2008）「エッセンシャルズ心理アセスメントレポートの書き方」日本文化科学社 ・カレン・ポーランドー（1999）『樹木画によるパーソナリティの理解』ナカニシヤ出版 ・カール・コッホ（2010）『バウムテスト（第3版）—心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究』誠信書房 ・下山晴彦・黒田美保編（2016）『臨床心理学第16巻第1号—発達障害のアセスメント』金剛出版 ・津川律子（2010）『シナリオで学ぶ医療現場の臨床心理検査』誠信書房 ・上野一彦、松田修、小林玄、木下智子（2015）『日本版 WISC-IVによる発達障害のアセスメント-代表的な指標パターンの解釈と事例紹介』日本文化科学社 ・山中康裕編（1984）『中井久夫著作集 別巻（1） H・Nakai 風景構成法』岩波学術出版社 	
成績評価 方法と基準	各テーマにおける課題レポート（60%）および授業への取り組み姿勢（40%）により評価し、全体で60%以上を合格とする。	

科目名	臨床心理査定演習Ⅱ	2単位
担当者	早川すみ江	
テーマ	心理検査の中でも主に投映法検査を通して、被験者の心理的問題を含めた行動やパーソナリティを深く把握、理解する。	
科目のねらい	<p><キーワード> 臨床心理査定, 投映法検査, ロールシャッハ・テスト, パーソナリティ, 精神力動的理解</p> <p><内容の要約> 臨床心理査定は、臨床心理面接と同様、臨床心理士・公認心理師の重要な業務のひとつであり、その目的は、援助対象者であるクライアントの良い面も悪い面も含めた行動やパーソナリティをトータルに把握し、理解することである。 本演習では、臨床心理査定の中の、主に投映法検査であるロールシャッハ・テストについて、実施法や結果の処理、解釈法などとともに、検査をおこなう上での倫理的事項についても学ぶ。</p> <p><学習目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・心理臨床の基礎となる対人関係能力をふまえ、適切な態度で投映法検査の実施ができる。 ・ロールシャッハ・テストについての専門的知識・技法を習得し、検査結果の処理について理解できる。 ・検査結果データの解釈を通して、クライアントの良い面も悪い面も含めた行動やパーソナリティをトータルに把握し、理解しようとのぞむことができる。 ・投映法検査をおこなう上での倫理的諸問題を理解することができる。 	
授業の進め方	<p>投映法検査の中のロールシャッハ・テストを取り上げ、検査の実施法から結果の処理の仕方および分析方法までを学習する。またロールシャッハ・テストの解釈仮説のベースとなる精神力動的な理解に基づく継起分析の方法を『精神力動論』をもとに学習する。</p> <p>第1回：ロールシャッハ・テストとは 第2～4回：スコアリング法 第5～6回：実施法・実施法実習 第7～8回：結果の整理 第9回：形式分析 第10～14回：継起分析のための基礎知識および継起分析の方法 第15回：スコアリング確認</p>	
事前学習の内容 学習上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・紹介した専門機関でロールシャッハ・テストの被験者体験実習を行ってもらおう。 ・指定テキスト『精神力動論』の発表担当者は、時間内に発表できるよう簡潔に章の内容をまとめ、説明し、質問に答えられるよう十分な準備をして臨むこと。発表担当者以外にも、事前に『精神力動論』を読んでおくこと。 	
本科目の関連科目	臨床心理査定演習Ⅰ、投映法特論	
テキスト	<ul style="list-style-type: none"> ・『改訂 新・心理診断法』片口安史著 金子書房（事務室より各自に貸し出しますので、購入の必要はありません） ・『精神力動論』小此木啓吾・馬場禮子著 金子書房（事務室より各自に貸し出しますので、購入の必要はありません） 	
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・E・O・リヒテンバーガー他著『エッセンシャルズ心理アセスメントレポートの書き方』2008 日本文化科学社 ・加藤志ほ子著『ロールシャッハ・テストの所見の書き方』2016 岩崎学術出版 	
成績評価方法と基準	課題レポート（80%）および授業への取り組み姿勢（20%）により評価し、全体で60%以上を合格とする。	

科目名	臨床心理基礎実習	2単位																
担当者	辻野 達也、小松原 智子、福元 理英																	
テーマ	心理臨床の基本的知識、技能、態度の体験的学習																	
科目のねらい	<p><キーワード> 面接技法、ロールプレイ、受理面接、アセスメント</p> <p><内容の要約> 「臨床心理学基礎実習」は1年次開講の必須科目であり、心理臨床活動における倫理や姿勢を学び、心理面接に必要な基礎的能力、技術を養うことを目的とする。前期は、基本技能の要点を学び、心理臨床の基盤となる対人的構えや感情理解など自己理解を深める。後期は、主に、ロールプレイや試行カウンセリングを通して、事例の見立てや面接の経過について理解を深める。</p> <p><学習目標> 心理面接を行う上で必要とされる基礎的な知識・技能を身につけることができる。 基本的技能また学内実習施設において運営・受付実習を体験することで、今後の実際の面接への心構えが形成できる。</p>																	
授業の進め方	<p>授業の進行はグループ学習を基本とし、前期は面接に至るまでのさまざまな基礎技術や面接での応答技法を体験的に学び、後期に向けてロールプレイを用いた実習を行う。また、後期は、実際の面接場面について学ぶ。実際の面接場面でみられるような主訴や問題の設定・場面の設定によるロールプレイなどの実習、ディスカッションから面接の要点を学ぶ。後期には教員・研究員の面接陪席などの体験学習に入る。</p> <table border="0"> <tr> <td>第 1 回～第 2 回</td> <td>前期オリエンテーション、カウンセリング基礎技法</td> </tr> <tr> <td>第 3 回～第 8 回</td> <td>ロールプレイ実習（応答練習）</td> </tr> <tr> <td>第 9 回～第 13 回</td> <td>ロールプレイの発表とディスカッション</td> </tr> <tr> <td>第 14 回</td> <td>前期の振り返りとまとめ</td> </tr> <tr> <td>第 15 回</td> <td>相談室実習オリエンテーション（7月頃を予定）</td> </tr> <tr> <td>第 16 回</td> <td>後期オリエンテーション</td> </tr> <tr> <td>第 17 回～第 29 回</td> <td>ロールプレイの発表とディスカッション</td> </tr> <tr> <td>第 30 回</td> <td>後期の振り返りとまとめ</td> </tr> </table> <p>その他、授業時間外に、ロールプレイ体験（カウンセラー役3回、クライアント役3回、計6回）を実施し、逐語録・面接記録を作成する。また、学内実習施設において、受付実習（電話応答実習）を体験する。</p>		第 1 回～第 2 回	前期オリエンテーション、カウンセリング基礎技法	第 3 回～第 8 回	ロールプレイ実習（応答練習）	第 9 回～第 13 回	ロールプレイの発表とディスカッション	第 14 回	前期の振り返りとまとめ	第 15 回	相談室実習オリエンテーション（7月頃を予定）	第 16 回	後期オリエンテーション	第 17 回～第 29 回	ロールプレイの発表とディスカッション	第 30 回	後期の振り返りとまとめ
第 1 回～第 2 回	前期オリエンテーション、カウンセリング基礎技法																	
第 3 回～第 8 回	ロールプレイ実習（応答練習）																	
第 9 回～第 13 回	ロールプレイの発表とディスカッション																	
第 14 回	前期の振り返りとまとめ																	
第 15 回	相談室実習オリエンテーション（7月頃を予定）																	
第 16 回	後期オリエンテーション																	
第 17 回～第 29 回	ロールプレイの発表とディスカッション																	
第 30 回	後期の振り返りとまとめ																	
事前学習の内容 学習上の注意	<p>学部で学んだ臨床心理学に関する授業を復習しておくこと。 実習の授業であることから、毎回の授業は積極的に参加すること。</p>																	
本科目の関連科目	臨床心理実習Ⅰ－①																	
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。																	
参考文献	<p>下山晴彦編『臨床心理学全書4 臨床心理実習論』誠信書房、2003 竹内 健児『Q & Aで学ぶ 心理療法の考え方・進め方』創元社、2015 津川律子『改訂増補 精神科臨床における心理アセスメント入門』金剛出版、2020 馬場禮子『精神分析的人格理論の基礎—心理療法を始める前に』岩崎学術出版社、2008 松木邦裕『耳の傾け方—こころの臨床家を目指す人たちへ』岩崎学術出版社、2015 鑓幹一郎・名島潤慈編『心理臨床家の手引き 第4版』誠信書房、2018 遠藤裕乃『ころんで学ぶ心理療法—初心者のための逆転入門』日本評論社、2003 渡辺雄三『私説・臨床心理学の方法—いかにクライアントを理解し、手助けするか』金剛出版、2011</p>																	
成績評価 方法と基準	<p>①授業への取り組み姿勢とディスカッションへの積極的参加 40%、②課題（発表資料、課題レポート）60%で評価し、総合評価60点以上を合格とする。なお、前期2/3以上の出席、および後期2/3以上の出席がない場合は評価の対象とならない。</p>																	

科目名	臨床心理実習Ⅰ－①（心理実践実習）	2単位																																																																																							
担当者	小松原智子・辻野 達也・福元 理英・早川 徹 瀬地山葉矢（SVのみ）・小川しおり*・早川すみ江*・堀美和子*・千賀則史* ・吉野真紀* *全体ケースカンファレンス、引継ぎカンファレンス、スーパーヴィジョンを担当																																																																																								
テーマ	学内実習を通して、心理臨床の知識と技能を習得する																																																																																								
科目のねらい	<キーワード> 学内実習、スーパーヴィジョン、ケース・カンファレンス、アセスメント <内容の要約> 学内実習（本学の心理臨床研究センター（心理臨床相談室）での実習、学内教員によるスーパーヴィジョン、ケース・カンファレンスへの参加およびケース報告や検討等）を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、実際に心理的支援を要する者等の理解および支援を実践していく力を養う。 <学習目標> 心理臨床における基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、実際に心理的支援を要する者等の理解および支援を実践していくことができる。																																																																																								
授業の進め方	<table border="1" data-bbox="443 770 1410 1738"> <tr><td>第 1</td><td>回</td><td>第1回 相談室打ち合わせ会</td></tr> <tr><td>第 2、3</td><td>回</td><td>オリエンテーション</td></tr> <tr><td>第 4</td><td>回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 5、6</td><td>回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 7、8</td><td>回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 9</td><td>回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 10、11</td><td>回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 12、13</td><td>回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 14</td><td>回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 15</td><td>回</td><td>第1回 リサーチカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 16、17</td><td>回</td><td>ケースカンファレンス、振り返り</td></tr> <tr><td>第 18</td><td>回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 19、20</td><td>回</td><td>ケース研究実習</td></tr> <tr><td>第 21</td><td>回</td><td>第2回 リサーチカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 22、23</td><td>回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 24、25</td><td>回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 26</td><td>回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 27、28</td><td>回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 29</td><td>回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 30、31</td><td>回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 32</td><td>回</td><td>第2回 相談室打ち合わせ会</td></tr> <tr><td>第 33</td><td>回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 34、35</td><td>回</td><td>講演会（シンポジウム）</td></tr> <tr><td>第 36</td><td>回</td><td>第3回 リサーチカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 37</td><td>回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 38、39</td><td>回</td><td>ケースカンファレンス、振り返り</td></tr> <tr><td>第 40</td><td>回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 41、42</td><td>回</td><td>引継ぎカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 43、44</td><td>回</td><td>引継ぎカンファレンス</td></tr> </table> <p data-bbox="384 1794 528 1827">【学内実習】</p> <p data-bbox="373 1832 1485 2007">□原則として、学内心理相談室における1年次の実習は、7月の学内実習説明会ののち、ケース担当実習を30時間程度担当すること。〔内訳：インテーク等の陪席、心理検査、心理面接等を1～2ケース（10時間程度）以上担当。担当ケース1セッションにつき、事前・事後学習（準備、記録、検討等）を1時間程度行い、1セッションにつき、スーパーヴィジョン1時間程度受けること。〕</p> <p data-bbox="373 2011 1485 2114">□相談室の実習では、受付実習や陪席とともに、心理面接および心理検査を担当し、担当スーパーヴァイザーらによるスーパーヴィジョンを受ける。また実習内容について、学内実習日誌にまとめる。</p>		第 1	回	第1回 相談室打ち合わせ会	第 2、3	回	オリエンテーション	第 4	回	全体ケースカンファレンス	第 5、6	回	ケースカンファレンス	第 7、8	回	ケースカンファレンス	第 9	回	全体ケースカンファレンス	第 10、11	回	ケースカンファレンス	第 12、13	回	ケースカンファレンス	第 14	回	全体ケースカンファレンス	第 15	回	第1回 リサーチカンファレンス	第 16、17	回	ケースカンファレンス、振り返り	第 18	回	全体ケースカンファレンス	第 19、20	回	ケース研究実習	第 21	回	第2回 リサーチカンファレンス	第 22、23	回	ケースカンファレンス	第 24、25	回	ケースカンファレンス	第 26	回	全体ケースカンファレンス	第 27、28	回	ケースカンファレンス	第 29	回	全体ケースカンファレンス	第 30、31	回	ケースカンファレンス	第 32	回	第2回 相談室打ち合わせ会	第 33	回	全体ケースカンファレンス	第 34、35	回	講演会（シンポジウム）	第 36	回	第3回 リサーチカンファレンス	第 37	回	全体ケースカンファレンス	第 38、39	回	ケースカンファレンス、振り返り	第 40	回	全体ケースカンファレンス	第 41、42	回	引継ぎカンファレンス	第 43、44	回	引継ぎカンファレンス
第 1	回	第1回 相談室打ち合わせ会																																																																																							
第 2、3	回	オリエンテーション																																																																																							
第 4	回	全体ケースカンファレンス																																																																																							
第 5、6	回	ケースカンファレンス																																																																																							
第 7、8	回	ケースカンファレンス																																																																																							
第 9	回	全体ケースカンファレンス																																																																																							
第 10、11	回	ケースカンファレンス																																																																																							
第 12、13	回	ケースカンファレンス																																																																																							
第 14	回	全体ケースカンファレンス																																																																																							
第 15	回	第1回 リサーチカンファレンス																																																																																							
第 16、17	回	ケースカンファレンス、振り返り																																																																																							
第 18	回	全体ケースカンファレンス																																																																																							
第 19、20	回	ケース研究実習																																																																																							
第 21	回	第2回 リサーチカンファレンス																																																																																							
第 22、23	回	ケースカンファレンス																																																																																							
第 24、25	回	ケースカンファレンス																																																																																							
第 26	回	全体ケースカンファレンス																																																																																							
第 27、28	回	ケースカンファレンス																																																																																							
第 29	回	全体ケースカンファレンス																																																																																							
第 30、31	回	ケースカンファレンス																																																																																							
第 32	回	第2回 相談室打ち合わせ会																																																																																							
第 33	回	全体ケースカンファレンス																																																																																							
第 34、35	回	講演会（シンポジウム）																																																																																							
第 36	回	第3回 リサーチカンファレンス																																																																																							
第 37	回	全体ケースカンファレンス																																																																																							
第 38、39	回	ケースカンファレンス、振り返り																																																																																							
第 40	回	全体ケースカンファレンス																																																																																							
第 41、42	回	引継ぎカンファレンス																																																																																							
第 43、44	回	引継ぎカンファレンス																																																																																							

	<p>□相談室の実習では、実習科目担当教員、スーパーヴァイザー、並行ケース担当相談員、相談室スタッフであるその他の心理臨床専攻の教員・研究員から指導を受け、支援や連携について実践的に学ぶ。</p> <p>【ケースカンファレンス】</p> <p>□アセスメントについての検討、クライアントの心の動きの理解、セラピストの介入の仕方、面接過程全体についての検討など焦点を絞り、主に2年生によるケース発表に対して検討を行う。臨床心理実習Ⅰ-②と合同で行う。</p> <p>□全体ケースカンファレンスは、毎月1回（年間9回）、学内相談室に所属する教員・研究員全体で行う。</p> <p>□2月には引継ぎケース・カンファレンスでのケース検討に参加する。</p> <p>【ケース研究実習】</p> <p>□事例研究の学習と発表を行う</p> <p>【心理臨床研究センター（心理臨床相談室）の活動】</p> <p>□心理相談室打ち合わせ会、リサーチカンファレンス、ケースカンファレンス、講演会・シンポジウムなどの開催準備や参加、相談室の運営、紀要編集などを行う。</p>
<p>事前学習の内容 学習上の注意</p>	<p>参考文献など、授業に関連する文献を読みながら学習を進めていくこと。</p>
<p>本科目の関連科目</p>	<p>臨床心理基礎実習、臨床心理実習Ⅰ-②（心理実践実習）、臨床心理実習Ⅰ-③（心理実践実習）</p>
<p>テキスト</p>	<p>実習中心の授業のため、特に指定しない。</p>
<p>参考文献</p>	<p>大塚義孝他監修，下山晴彦編『臨床心理学全書4 臨床心理実習論』誠信書房，2003 鑪幹八郎・名島潤慈編『心理臨床家の手引 [第4版]』誠信書房，2018 竹内健児『100のワークで学ぶカウンセリングの見立てと方針』創元社，2021 竹内健児『Q & Aで学ぶ 遊戯療法と親面接の考え方・進め方』創元社，2019 小俣和義『親子面接のすすめ方—子どもと親をつなぐ心理臨床』金剛出版，2006 飽田典子『遊戯法（プレイセラピー）—子どもの心理臨床入門』新曜社，1999 田中千穂子『心理臨床への手引き—初心者の問いに答える』東京大学出版会，2016 河合隼雄『カウンセリングの実際問題』誠信書房，1996 熊倉伸宏『面接法』新興医学出版社，2002 他，授業で随時紹介する。</p>
<p>成績評価 方法と基準</p>	<p>①ディスカッションへの参加姿勢 20%、②課題（レポート、学内実習日誌）の提出と内容評価 40%、③学内実習への取り組み（相談活動と連携、及びSVへの取り組み。事例の適切な理解と対応。相談活動に関する手引きやガイドラインの遵守。心理臨床研究センターの活動全般に関する責任感、主体性、積極性のある取り組み）40%で評価し、総合評価60点以上を合格とする。</p>

科目名	臨床心理実習 I -② (心理実践実習)	4 単位																																																		
担当者	小松原智子・辻野 達也・福元 理英・早川 徹 瀬地山葉矢 (SV のみ)・小川しおり*・早川すみ江*・堀美和子*・千賀則史* ・吉野真紀* *全体ケースカンファレンス、引継ぎカンファレンス、スーパーヴィジョンを担当																																																			
テーマ	学内実習を通して、心理臨床の知識と技能を習得する																																																			
科目のねらい	<キーワード> 学内実習、スーパーヴィジョン、ケース・カンファレンス、アセスメント <内容の要約> 学内実習(本学の心理臨床研究センター(心理臨床相談室)での実習、学内教員によるスーパーヴィジョン、ケース・カンファレンスへの参加およびケース報告や検討等)を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、実際に心理的支援を要する者等の理解および支援を実践していく力を養う。 <学習目標> 心理臨床における基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、実際に心理的支援を要する者等の理解および支援を実践していくことができる。																																																			
授業の進め方	<table border="1" data-bbox="475 757 1378 1585"> <tr><td>第 1、 2 回</td><td>オリエンテーション</td></tr> <tr><td>第 3 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 4、 5 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 6、 7 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 8 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 9、 10 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 11、 12 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 13 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 14、 15 回</td><td>ケースカンファレンス、振り返り</td></tr> <tr><td>第 16 回</td><td>ケース研究実習(オリエンテーション)</td></tr> <tr><td>第 17 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 18、 19 回</td><td>ケース研究実習</td></tr> <tr><td>第 20、 21 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 21 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 22、 23 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 24 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 25、 26 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 27 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 28、 29 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 30 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 31 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 32、 33 回</td><td>ケースカンファレンス、振り返り</td></tr> <tr><td>第 34 回</td><td>振り返り</td></tr> <tr><td>第 35、 36 回</td><td>引継ぎカンファレンス</td></tr> <tr><td>第 37、 38 回</td><td>引継ぎカンファレンス</td></tr> </table> <p data-bbox="384 1621 1490 2119"> 【学内実習】 <input type="checkbox"/> 原則として、学内心理相談室における 2 年次のケース担当実習は 150 時間程度担当すること。 [内訳：インテーク等の陪席、心理検査、心理面接等を 3~4 ケース(60 時間程度)以上担当する。また、1 セッションにつき、事前・事後学習(準備、記録、検討等)を 1 時間程度行い、1~2 セッションにつき、スーパーヴィジョン 1 時間程度受けること。] <input type="checkbox"/> 相談室の実習では、受付実習や陪席とともに、心理面接および心理検査を担当し、担当スーパーヴァイザーらによるスーパーヴィジョンを受ける。また、実習内容について学内実習日誌にまとめる。 <input type="checkbox"/> 相談室の実習では、実習科目担当教員、スーパーヴァイザー、並行ケース担当相談員、相談室スタッフであるその他の心理臨床専攻の教員・研究員から指導を受け、支援や連携について実践的に学ぶ。 【ケースカンファレンス】 <input type="checkbox"/> アセスメントについての検討、クライアントの心の動きの理解、セラピストの介入の仕方、面接過程全体についての検討など、焦点を絞ったケース検討を行う。臨床心理実習 I -①と合同で行う。 </p>		第 1、 2 回	オリエンテーション	第 3 回	全体ケースカンファレンス	第 4、 5 回	ケースカンファレンス	第 6、 7 回	ケースカンファレンス	第 8 回	全体ケースカンファレンス	第 9、 10 回	ケースカンファレンス	第 11、 12 回	ケースカンファレンス	第 13 回	全体ケースカンファレンス	第 14、 15 回	ケースカンファレンス、振り返り	第 16 回	ケース研究実習(オリエンテーション)	第 17 回	全体ケースカンファレンス	第 18、 19 回	ケース研究実習	第 20、 21 回	ケースカンファレンス	第 21 回	全体ケースカンファレンス	第 22、 23 回	ケースカンファレンス	第 24 回	全体ケースカンファレンス	第 25、 26 回	ケースカンファレンス	第 27 回	全体ケースカンファレンス	第 28、 29 回	ケースカンファレンス	第 30 回	全体ケースカンファレンス	第 31 回	全体ケースカンファレンス	第 32、 33 回	ケースカンファレンス、振り返り	第 34 回	振り返り	第 35、 36 回	引継ぎカンファレンス	第 37、 38 回	引継ぎカンファレンス
第 1、 2 回	オリエンテーション																																																			
第 3 回	全体ケースカンファレンス																																																			
第 4、 5 回	ケースカンファレンス																																																			
第 6、 7 回	ケースカンファレンス																																																			
第 8 回	全体ケースカンファレンス																																																			
第 9、 10 回	ケースカンファレンス																																																			
第 11、 12 回	ケースカンファレンス																																																			
第 13 回	全体ケースカンファレンス																																																			
第 14、 15 回	ケースカンファレンス、振り返り																																																			
第 16 回	ケース研究実習(オリエンテーション)																																																			
第 17 回	全体ケースカンファレンス																																																			
第 18、 19 回	ケース研究実習																																																			
第 20、 21 回	ケースカンファレンス																																																			
第 21 回	全体ケースカンファレンス																																																			
第 22、 23 回	ケースカンファレンス																																																			
第 24 回	全体ケースカンファレンス																																																			
第 25、 26 回	ケースカンファレンス																																																			
第 27 回	全体ケースカンファレンス																																																			
第 28、 29 回	ケースカンファレンス																																																			
第 30 回	全体ケースカンファレンス																																																			
第 31 回	全体ケースカンファレンス																																																			
第 32、 33 回	ケースカンファレンス、振り返り																																																			
第 34 回	振り返り																																																			
第 35、 36 回	引継ぎカンファレンス																																																			
第 37、 38 回	引継ぎカンファレンス																																																			

	<p>□全体ケースカンファレンスは、毎月1回（年間9回）、学内相談室に所属する教員・研究員全体で行う。</p> <p>□2月には引継ぎケース・カンファレンスでのケース検討に参加する。</p> <p>【参考】 公認心理師の資格取得を目指す場合には、大学院修了までに、学内実習及び学外実習の総実習時間が計 450 時間以上となること。そのうち担当ケース（心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援等）に関する実習時間は計 270 時間（うち、学外施設における当該実習時間は 90 時間以上行うこと）となること。</p>
事前学習の内容 学習上の注意	参考文献など、授業に関連する文献を読みながら学習を進めていくこと。
本科目の関連科目	臨床心理実習Ⅰ－①
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。
参考文献	<p>竹内健児『100のワークで学ぶカウンセリングの見立てと方針』創元社、2021</p> <p>竹内健児『Q & A で学ぶ 心理療法の考え方・進め方』創元社、2015</p> <p>小俣和義『親子面接のすすめ方—子どもと親をつなぐ心理臨床』金剛出版、2006</p> <p>山本力・鶴田和美編『心理臨床家のための「事例研究」の進め方』北大路書房、2001</p> <p>津川律子・遠藤裕乃著『初心者のための臨床心理学研究実践マニュアル』金剛出版、2011</p> <p>松木邦裕『改訂増補 私説対象関係論的心理療法入門—精神分析的アプローチのすすめ』金剛出版、2016</p> <p>成田善弘『セラピストのための面接技法』金剛出版、2003</p> <p>栗原和彦『心理臨床家の個人開業』星和書店、2011</p>
成績評価 方法と基準	①ディスカッションへの参加姿勢 20%、②課題（カンファレンス発表レジュメ、発表内容、レポート、学内実習日誌）の提出と内容評価 40%、③学内実習への取り組み（相談活動と連携、及びSVへの取り組み。事例の適切な理解と対応。相談活動に関する手引きやガイドラインの遵守。心理臨床研究センターの活動全般に関する責任感、主体性、積極性のある取り組み）40%で評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。

科目名	臨床心理実習 I - ③ (心理実践実習)	2 単位
担当者	辻野 達也・小松原智子・福元 理英 瀬地山葉矢*・小川しおり*・早川すみ江*・堀美和子*・千賀則史*・吉野真紀* *巡回指導担当	
テーマ	学外施設での実習を通じて、心理臨床活動の実際的な知識と技術を学ぶ。	
科目のねらい	<p><キーワード> 学外実習, 心理職業務の実際, 心理的支援, 他職種連携と地域支援, 職業倫理と法的義務</p> <p><内容の要約> 学外実習(学外施設での実習)と事前・事後の学習を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、心理的支援の実際について理解を深め、支援を実践していく力を養う。学外施設では実習先の指導担当者および大学の実習担当教員(各実習施設の指導を担当する巡回指導教員)による指導のもとに実務を体験し、実践を通じて心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務などを学ぶ。</p> <p><学習目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・心理臨床とその近接領域に関する専門知識および基礎となる対人関係能力をふまえて、さまざまな臨床場面、多様な対象に適切に臨むことができる。 ・心理臨床の実務を体験し、心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務について理解することができる。 	
授業の進め方	<p>【授業】</p> <p>第1・2回 : 第1回学外実習オリエンテーション 第3・4回 : 第2回学外実習オリエンテーション 第5・6回 : 事前学習(福祉・教育・見学実習に向けて) 第7回 : 事前学習(医療) 第8・9回 : 見学実習 第10回 : 見学実習後指導・課題検討 第11・12回 : 実習先指導(1ヶ所目継続実習) 第13回 : 中間振り返り・課題検討 第14・15回 : 実習報告・振り返り</p> <p>【学外実習】</p> <p><実習期間・内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学外実習施設における実習は、1年次後期より開始する。 ・1年次においては、見学を主とする実習(1日)1箇所に参加し、その後、原則1箇所、実習施設ごとに指定された日程で、10日間(毎週の継続、または連続した日程・1日6時間程度)の実習を行う。 ・実習生は、支援に必要な知識・技能の基礎的な理解の上に、(ア)から(オ)の事項について、見学だけでなく、心理に関する支援を要する者等に対して支援を実践しながら、実習指導者又は実習担当教員(巡回指導教員)による指導を受けて修得していく。 <ul style="list-style-type: none"> (ア) 心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援等の知識及び技能の修得 (イ) 心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成 (ウ) 心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ (エ) 多職種連携及び地域連携 (オ) 臨床心理士及び公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解 <p><実習準備・実習指導></p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習先が決まった実習生は、「実習の手引き」(授業内で配布)を熟読し、事前準備や実習計画書の作成を行い、実習担当教員(巡回指導教員)から、学外施設への実習事前訪問に関する打ち合わせや指導を受ける。 ・実習生は、学外実習施設の実習指導者および実習担当教員と、事前訪問による打ち合わせ(実習オリエンテーション)や施設見学を行う。 ・実習期間中は、学外実習施設の実習指導者の指導を受けて施設実習を行い、実習報告を毎回作成すると同時に、実習担当教員による実習指導や施設での訪問指導を受ける。訪問 	

	<p>指導は 10 日間の実習の場合、5 回につき 1 回、計 2 回受ける。</p> <p><参考> 公認心理師の資格取得を目指す場合には、以下の実習時間が必要とされる。2 年間で原則、下記の領域および時間数を行うものとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学外施設での担当ケースに関する実習の時間は 90 時間以上とする（なお、学内実習と合わせた担当ケースの実習時間数は 270 時間以上とする）。 ・実習施設は、保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の 5 分野うち、医療機関は必須とし、3 分野以上の施設において実習を受けることが望ましい。医療機関以外の施設においては、見学を中心とする実習も含む。
事前学習の内容 学習上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・学外実習は原則毎週の継続、または連続した日程で行うこと ・各実習先に必要な基礎知識や心理検査技法を事前に勉強しておくこと
本科目の 関連科目	臨床心理基礎実習、臨床心理実習Ⅰ－①
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・津川律子・橋玲子編『心理職を目指す大学院生のための精神科実習ガイド』誠信書房、2022 ・津川律子・篠竹利和『シナリオで学ぶ医療現場の臨床心理検査』誠信書房、2010 ・鏑幹一郎・名島潤慈『心理臨床家の手引[第 4 版]』誠信書房、2018 ・滝川一廣『子どものための精神医学』医学書院、2017 ・東畑開人『居るのはつらいよーケアとセラピーについての覚書』医学書院、2019 ・一般社団法人日本公認心理師養成機関連盟編『公認心理師養成の実習ガイド』日本評論社、2019 ・窪田彰『精神科デイケアの始め方・進め方』、2004 ・窪田彰編『多機能型精神科診療所による地域づくり チームアプローチによる包括的ケアシステム』、2016 ・日本精神科病院協会監修 岸本年史編著『精神科研修ハンドブック』海馬書房、2005 ・笠原嘉著『予診・初診・初期治療 精神科選書Ⅰ』星和書店、2007 ・全国情緒障害児短期治療施設協議会編『心をはぐくむⅢ－総合環境療法の臨床－』、2002 ・森田喜治『児童養護施設と被虐待児－施設内心理療法家からの提言』創元社、2006 ・橋本和明『虐待と非行臨床』創元社、2004 ・黒田美保著『これからの発達障害のアセスメント：支援の一步となるために』、金子書房、2015
成績評価 方法と基準	<p>以下の A の項目が達成されていることを条件とし、B の各項目について評価して総合評価 60 点以上を合格とする。</p> <p>A：①事前・事後の授業での発表、1 箇所の見学実習 ②1 箇所 10 日程度での施設での実習</p> <p>B：①事前学習による実習施設の理解、事前準備や打ち合わせでの積極的調整。②心理的支援の基本的態度・知識・技術の修得。多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務等についての理解。③実習態度（社会性・責任感・主体性・協調性・関係づくりなど）。④実習日誌等の実習記録の適切な整備。⑤実習報告書の内容と発表、実習体験の振り返りと自己の課題の理解</p>

科目名	臨床心理実習 I ー④（心理実践実習）	2 単位
担当者	辻野 達也・小松原智子・福元 理英 瀬地山葉矢*・小川しおり*・早川すみ江*・堀美和子*・千賀則史*・吉野真紀* *巡回指導担当	
テーマ	学外施設での実習を通じて、心理臨床活動の実際的な知識と技術を学ぶ。	
科目のねらい	<p><キーワード> 学外実習、心理職業務の実際、心理的支援、他職種連携と地域支援、職業倫理と法的義務</p> <p><内容の要約> 学外実習（学外施設での実習）と事前・事後の学習を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、心理的支援の実際について理解を深め、支援を実践していく力を養う。学外施設では実習先の指導担当者および大学の実習担当教員（各実習施設の指導を担当する巡回指導教員）による指導のもとに実務を体験し、実践を通じて心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務などを学ぶ。</p> <p><学習目標> ・心理臨床とその近接領域に関する専門知識および基礎となる対人関係能力をふまえて、さまざまな臨床場面、多様な対象に適切に臨むことができる。 ・心理臨床の実務を体験し、心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務について理解することができる。</p>	
授業の進め方	<p>【授業】 第01～05回：事前学習（医療・福祉・教育） 第06～09回：学外実習 第10～15回：実習報告会・まとめ</p> <p>【学外実習】 <実習期間・内容> ・1年次後期学外実習を終えた者に対して、2年次前期より、学外実習施設における実習を開始する。 ・原則1箇所、実習施設ごとに指定された日程で、10日間（毎週の継続、または連続した日程・1日6時間程度）の実習を行う。 ・実習生は、支援に必要な知識・技能の基礎的な理解の上に、（ア）から（オ）の事項について、見学だけでなく、心理に関する支援を要する者等に対して支援を実践しながら、実習指導者又は実習担当教員（巡回指導教員）による指導を受けて修得していく。 （ア）心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援等の知識及び技能の修得 （イ）心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成 （ウ）心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ （エ）多職種連携及び地域連携 （オ）臨床心理士及び公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解</p> <p><実習準備・実習指導> ・実習先が決まった実習生は、「実習の手引き」（授業内で配布）を熟読し、事前準備や実習計画書の作成を行い、実習担当教員（巡回指導教員）から、学外施設への実習事前訪問に関する打ち合わせや指導を受ける。 ・実習生は、学外実習施設の実習指導者および実習担当教員と、事前訪問による打ち合わせ（実習オリエンテーション）や施設見学を行う。 ・実習期間中は、学外実習施設の実習指導者の指導を受けて施設実習を行い、実習報告を毎回作成すると同時に、実習担当教員による実習指導や施設での訪問指導を受ける。</p> <p><参考> 公認心理師の資格取得を目指す場合には、以下の実習時間が必要とされる。2年間で原則、下記の領域および時間数を行うものとする。 ・学外施設での担当ケースに関する実習の時間は90時間以上とする（なお、学内実習と</p>	

	<p>合わせた担当ケースの実習時間数は 270 時間以上とする)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習施設は、保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の 5 分野うち、医療機関は必須とし、3 分野以上の施設において実習を受けることが望ましい。医療機関以外の施設においては、見学を中心とする実習も含む。 ・訪問指導は 10 日間の実習の場合、5 回につき 1 回、計 2 回受ける。
事前学習の内容 学習上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・学外実習は原則毎週の継続、または連続した日程で行うこと ・各実習先に必要な基礎知識や心理検査技法を事前に勉強しておくこと
本科目の関連科目	臨床心理実習 I -②、臨床心理実習 I -③、⑤
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・津川律子・橘玲子編『心理職を目指す大学院生のための精神科実習ガイド』誠信書房、2022 ・津川律子・篠竹利和『シナリオで学ぶ医療現場の臨床心理検査』誠信書房、2010 ・鑪幹八郎・名島潤慈『心理臨床家の手引[第 4 版]』誠信書房、2018 ・滝川一廣『子どものための精神医学』医学書院、2017 ・一般社団法人日本公認心理師養成機関連盟編『公認心理師養成の実習ガイド』日本評論社、2019 ・東畑開人『居るのはつらいよーケアとセラピーについての覚書』医学書院、2019 ・窪田彰『精神科デイケアの始め方・進め方』、2004 ・窪田彰編『多機能型精神科診療所による地域づくり チームアプローチによる包括的ケアシステム』、2016 ・日本精神科病院協会監修 岸本年史編著『精神科研修ハンドブック』海馬書房、2017 ・笠原嘉著『予診・初診・初期治療 精神科選書 I』診療新社、2007 ・全国情緒障害児短期治療施設協議会編『心をはぐくむⅢー総合環境療法の臨床ー』、2002 ・森田喜治『児童養護施設と被虐待児ー施設内心理療法家からの提言』創元社、2006 ・橋本和明『虐待と非行臨床』創元社、2004 ・黒田美保著『これからの発達障害のアセスメント：支援の一步となるために』、金子書房、2015
成績評価 方法と基準	<p>以下の A の項目が達成されていることを条件とし、B の各項目について評価して総合評価 60 点以上を合格とする。</p> <p>A：①事前・事後の授業での発表、 ②1 箇所 10 日程度での施設での実習</p> <p>B：①事前学習による実習施設の理解、事前準備や打ち合わせでの積極的調整。②心理的支援の基本的態度・知識・技術の修得。多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務等についての理解。③実習態度（社会性・責任感・主体性・協調性・関係づくりなど）。④実習日誌等の実習記録の適切な整備。⑤実習報告書の内容と発表、実習体験の振り返りと自己の課題の理解</p>

科目名	臨床心理実習Ⅱ	1単位
担当者	小松原智子、辻野 達也、福元 理英	
テーマ	他機関の専門家との連携方法について実践的に学び、他機関専門家の臨床や研究の知を学ぶ。また、心理臨床相談室の組織運営に携わる中で組織内関係についても学ぶ。	
科目のねらい	<p><キーワード> 他機関との連携、リサーチカンファレンス、講演会、事例研究、組織内連携</p> <p><内容の要約> 講義や演習・その他の実習で学んだことを実践する場としての、学内心理臨床相談室（心理臨床研究センター）において、相談室運営に携わる一員として役割意識をもち、相談室内の連携・活動・事例研究の方法について学ぶ。 また、リサーチカンファレンス、講演会等の企画や開催に関わるなかで、学外の専門機関の専門家との連携について実践的に学び、他職種の専門家の臨床や研究の知を学ぶ。</p> <p><学習目標> ・心理臨床相談室の運営に積極的に関わる中で、組織内での円滑な行動・連携・協力を行うことができる。 ・リサーチカンファレンスや他機関との連携会議に関わる中で、企画の力や他機関の専門家との連携の仕方について学び、多職種の知見を理解することができる。</p>	
授業の進め方	<p>時間割上は火曜日月1回程度。</p> <p>第1、2回：心理臨床相談室打ち合わせ会①、相談室活動 第3回：リサーチカンファレンス① 第4回：リサーチカンファレンス② 第5、6回：心理臨床相談室打ち合わせ会②、相談室活動 第7、8回：他機関との連携 第9、10回：講演会 第11回：リサーチカンファレンス③</p> <p>他機関との連携は、リサーチカンファレンスや講演会等の企画や開催打ち合わせ等とする。その他、紀要（事例研究）に関する指導を受け、紀要に関わる活動にも携わることとする。</p>	
事前学習の内容 学習上の注意	院生同士の協力や積極的な参加の姿勢が求められる。	
本科目の 関連科目	臨床心理実習Ⅰ－①、臨床心理実習Ⅰ－②	
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。	
参考文献	リサーチカンファレンスや講演会にお招きする専門家の論文・著書	
成績評価 方法と基準	各役割における参加姿勢70%、課題（レポート）の提出と内容評価30%	

科目名	心理学研究法特論	2 単位																																																												
担当者	千賀則史・小川しおり・早川 すみ江・堀 美和子・吉野 真紀																																																													
テーマ	修士論文作成の基礎																																																													
科目のねらい	<p><キーワード> 実証的研究、研究倫理、研究方法、質的研究、研究計画</p> <p><内容の要約> 本特論の目的は、心理学の実証的な研究についての理解を深めることを通して修士論文研究（臨床心理学に関わる研究）を推進し、研究論文を作成する基礎的な力を養うことである。</p> <p><学習目標></p> <ol style="list-style-type: none"> ① 研究の意義や研究の進め方、研究倫理を理解できる。 ② 代表的な臨床心理学の研究手法（面接法、質問紙調査法、質的研究、事例研究法、検査法など）を学び、それを説明することができる。 ③ 修士論文の研究計画書を作成することができる。 ④ 論文を批判的に読む力を身につけることができる。 																																																													
授業の進め方	<p>授業の進め方は講義だけでなく、各自の発表（研究方法各論、研究計画書、関連論文の詳読）を取り入れて進める。講義は以下のスケジュールで進める予定。</p> <table border="0"> <tr> <td>第 1 回</td> <td>「心理学研究法特論」のオリエンテーション：</td> <td>千賀</td> <td>(4/10)</td> </tr> <tr> <td>第 2 回</td> <td>研究計画書の書き方・研究倫理：</td> <td>千賀</td> <td>(4/10)</td> </tr> <tr> <td>第 3 回</td> <td>研究法各論（質問紙調査法）：</td> <td>吉野</td> <td>(4/24)</td> </tr> <tr> <td>第 4 回</td> <td>研究法各論（事例研究法）：</td> <td>早川</td> <td>(4/24)</td> </tr> <tr> <td>第 5 回</td> <td>研究法各論（実践研究）：</td> <td>堀</td> <td>(5/8)</td> </tr> <tr> <td>第 6 回</td> <td>研究法各論（実験・検査法）：</td> <td>小川</td> <td>(5/8)</td> </tr> <tr> <td>第 7 回</td> <td>研究法各論（面接法・質的研究）：</td> <td>千賀</td> <td>(5/22)</td> </tr> <tr> <td>第 8 回</td> <td>研究法各論（介入研究）：</td> <td>千賀</td> <td>(5/22)</td> </tr> <tr> <td>第 9 回</td> <td>各自の研究計画書の発表と討論（1）：</td> <td>千賀</td> <td>(6/5)</td> </tr> <tr> <td>第 10 回</td> <td>各自の研究計画書の発表と討論（2）：</td> <td>千賀</td> <td>(6/5)</td> </tr> <tr> <td>第 11 回</td> <td>各自の研究計画書の発表と討論（3）：</td> <td>千賀</td> <td>(6/19)</td> </tr> <tr> <td>第 12 回</td> <td>関連論文講読：</td> <td>千賀</td> <td>(6/19)</td> </tr> <tr> <td>第 13 回</td> <td>関連論文講読：</td> <td>千賀</td> <td>(7/3)</td> </tr> <tr> <td>第 14 回</td> <td>関連論文講読：</td> <td>千賀</td> <td>(7/3)</td> </tr> <tr> <td>第 15 回</td> <td>まとめと後期以後の修論の取り組み：</td> <td>千賀</td> <td>(7/24)</td> </tr> </table> <p>各論については履修者の研究で用いる可能性がある研究法を優先的に学ぶように配慮するため、変更の可能性がある。</p>		第 1 回	「心理学研究法特論」のオリエンテーション：	千賀	(4/10)	第 2 回	研究計画書の書き方・研究倫理：	千賀	(4/10)	第 3 回	研究法各論（質問紙調査法）：	吉野	(4/24)	第 4 回	研究法各論（事例研究法）：	早川	(4/24)	第 5 回	研究法各論（実践研究）：	堀	(5/8)	第 6 回	研究法各論（実験・検査法）：	小川	(5/8)	第 7 回	研究法各論（面接法・質的研究）：	千賀	(5/22)	第 8 回	研究法各論（介入研究）：	千賀	(5/22)	第 9 回	各自の研究計画書の発表と討論（1）：	千賀	(6/5)	第 10 回	各自の研究計画書の発表と討論（2）：	千賀	(6/5)	第 11 回	各自の研究計画書の発表と討論（3）：	千賀	(6/19)	第 12 回	関連論文講読：	千賀	(6/19)	第 13 回	関連論文講読：	千賀	(7/3)	第 14 回	関連論文講読：	千賀	(7/3)	第 15 回	まとめと後期以後の修論の取り組み：	千賀	(7/24)
第 1 回	「心理学研究法特論」のオリエンテーション：	千賀	(4/10)																																																											
第 2 回	研究計画書の書き方・研究倫理：	千賀	(4/10)																																																											
第 3 回	研究法各論（質問紙調査法）：	吉野	(4/24)																																																											
第 4 回	研究法各論（事例研究法）：	早川	(4/24)																																																											
第 5 回	研究法各論（実践研究）：	堀	(5/8)																																																											
第 6 回	研究法各論（実験・検査法）：	小川	(5/8)																																																											
第 7 回	研究法各論（面接法・質的研究）：	千賀	(5/22)																																																											
第 8 回	研究法各論（介入研究）：	千賀	(5/22)																																																											
第 9 回	各自の研究計画書の発表と討論（1）：	千賀	(6/5)																																																											
第 10 回	各自の研究計画書の発表と討論（2）：	千賀	(6/5)																																																											
第 11 回	各自の研究計画書の発表と討論（3）：	千賀	(6/19)																																																											
第 12 回	関連論文講読：	千賀	(6/19)																																																											
第 13 回	関連論文講読：	千賀	(7/3)																																																											
第 14 回	関連論文講読：	千賀	(7/3)																																																											
第 15 回	まとめと後期以後の修論の取り組み：	千賀	(7/24)																																																											
事前学習の内容・学習上の注意	学部レベルの「心理学研究法」については習得、復習しておくこと。																																																													
本科目の関連科目	心理統計法特論																																																													
テキスト	特に指定しない。																																																													
参考文献	<p>西條剛央『ライブ講義 質的研究とは何か SCORM ベーシック編』新曜社、2007 年</p> <p>西條剛央『ライブ講義 質的研究とは何か SCORM アドバンス編』新曜社、2008 年</p> <p>サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編『質的研究法マッピング』新曜社、2019 年</p> <p>友利幸之介・京極真・竹林崇『作業で創るエビデンス』医学書院、2019 年</p>																																																													
成績評価方法と基準	研究法各論および関連論文の発表、討論へのコミットメント（50%）、研究計画書の作成（50%）により評価を行い、全体で 60%以上を合格とする。																																																													

科目名	心理統計法特論	2単位
担当者	千賀則史	
テーマ	心理尺度の構成および相関研究の実践を通して、各種心理統計の技法を習得する	
科目のねらい	<p><キーワード> 記述統計、推測統計、心理尺度の構成、項目分析、相関研究</p> <p><内容の要約> 本特論では心理学研究の基礎的な統計手法について、実践を通して習得する。そのため、心理尺度を自身で作成し、この尺度によって測定される特性とパーソナリティの主要5因子との関係を調べる相関研究を実践する。まず記述統計と心理尺度の構成、および相関研究に関する基礎的な学習を行ない、質問紙を完成させる。その後各自で収集したデータをもとに、心理尺度の構成において求められる項目分析や因子分析、さらにパーソナリティとの相関研究などにより、各種の心理統計技法を学ぶ。解析は統計パッケージ（SPSS）を使用する。</p> <p><学習目標> ① 心理学研究に用いられる統計の基礎を理解することができる。 ② 各種統計手法を用いた心理データの分析を実施することができる。 ③ 心理尺度の構成を自身で行うことができる。</p>	
授業の進め方	第1回 イン트로ダクション 第2回 記述統計と尺度構成の基礎 第3回 尺度項目の作成 第4回 相関研究の基礎 第5回 質問紙の作成 第6回 基本統計量の算出 第7回 推測統計の基礎 第8回 項目分析（I-T 相関）、信頼性分析 第9回 因子分析1 第10回 因子分析2 第11回 <i>t</i> 検定 第12回 分散分析 第13回 クロス集計とカイ二乗検定 第14回 その他の解析 第15回 まとめ	
事前学習の内容 学習上の注意	演習内容は知識やスキルを積み上げていく構成となっている。そこで各回各自で復習を行い、学習内容を習得していることを前提とする。また授業時間外にデータ収集など課題を課すことがある。なお、授業では統計解析パッケージ（SPSS）を使用する。受講生にはPC操作の基礎的技能が求められる。	
本科目の関連科目	心理学研究法特論	
テキスト	使用しない（レジュメを使用する）。	
参考文献	授業内で指示する。	
成績評価 方法と基準	課題レポート（30%）、演習への積極的参加度（30%）、最終レポート（40%）により評価を行い、全体で60%以上を合格とする。	

科目名	人格心理学特論 (教育分野に関する理論と支援の展開)	2 単位
担当者	小塩真司	
テーマ	人間の心理学的個人差の意味を探究する	
科目のねらい	<p><キーワード> 1. パーソナリティ, 2. 教育, 3. 心理測定, 4. 発達, 5. 適応</p> <p><内容の要約> パーソナリティ心理学を中心に, 教育や発達など周辺領域を含む心理学的な個人差を扱う研究知見について理解を深める。パーソナリティ心理学は, 長い歴史をもち教育場面・臨床場面をはじめとする他分野にも広く応用されてきた。近年では, 多くのデータと統計処理手法によって, 人間の直観的理解を超えた研究知見が数多く生み出されてきている。パーソナリティ心理学の歴史の変遷と研究知見, 研究方法, 個人差の測定方法を学び, 人間の個人差を理解することができる。</p> <p><学習目標> 臨床心理にかかわる心理学的個人差について理解する。 心理学的な個人差概念を用いて, 適切な問題意識のもとに研究を計画することができる。</p>	
授業の進め方	第1回 導入: パーソナリティ心理学とは 第2回 人間の個人差を考える 第3回 パーソナリティ概念を理解する 第4回 心理学的な個人差測定の背景を理解する 第5回 類型論を理解する 第6回 特性論を理解する 第7回 語彙仮説から一般因子の探究へ 第8回 Big Five パーソナリティの発見 第9回 パーソナリティ尺度・パーソナリティ検査 第10回 発達について考える 第11回 現実社会のなかのパーソナリティ 第12回 知能検査の成立と社会への影響 第13回 「よいパーソナリティ」という考え方 第14回 現実への応用: 心理アセスメントと心理学的支援 第15回 まとめ	
事前学習の内容 学習上の注意	心理学の基礎的な知識および, 調査の手法を用いた心理学の基礎的な知識を前提として講義を行う。参考図書の内いずれかに目を通し, 理解が深めることが望ましい。	
本科目の関連科目	臨床心理査定演習 I, 心理統計法特論, 社会心理学特論	
テキスト	なし	
参考文献	杉山憲司・小塩真司 (2021). パーソナリティ・知能 キーワード心理学 11 新曜社 小塩真司 (2021). 非認知能力: 概念・測定と教育の可能性 北大路書房 小塩真司 (2020). 性格とは何か 中央公論新社 小塩真司 (2018). 性格がいい人、悪い人の科学 日本経済新聞出版社	
成績評価方法と基準	授業内で記入するコメントシート (50%) と最終レポート (50%) を総合的に評価する。総合評価 60 点以上を合格とする。	

科目名	教育臨床心理学特論（教育分野に関する理論と支援の展開）	2単位																														
担当者	福元 理英																															
テーマ	子どもと保護者、学校を援助する方法について学ぶ																															
科目のねらい	<p><キーワード> 学校臨床、スクールカウンセラー、心理教育、コンサルテーション、学習支援</p> <p><内容の要約> スクールカウンセラーとして心理職が学校に入り、子どもの発達・学習支援や臨床心理学的な支援を行う意義とその方法について学ぶ。子ども・保護者との相談、教員との連携、学校・地域への支援方法について、事例検討・ディスカッションを通して学んでいく。</p> <p><学習目標> 学校臨床の枠組みについて学び、スクールカウンセラーとしての職務、具体的な支援方法（個別支援、他職種との連携）について理解することができる。</p>																															
授業の進め方	<p>授業では、学校臨床の基礎的な知識と実践について広く学ぶため、講義・ディスカッション・事例検討などを行う。</p> <table border="1"> <tr><td>第 1 回</td><td>オリエンテーション・スクールカウンセラー制度について</td></tr> <tr><td>第 2 回</td><td>スクールカウンセリングの枠組み</td></tr> <tr><td>第 3 回</td><td>子どもの発達課題の理解</td></tr> <tr><td>第 4 回</td><td>3段階の心理教育的援助サービスと心理教育</td></tr> <tr><td>第 5 回</td><td>発達障害の理解</td></tr> <tr><td>第 6 回</td><td>発達障害児童生徒・保護者への支援</td></tr> <tr><td>第 7 回</td><td>特別支援教育（通常学級と特別支援学級、通級による指導）</td></tr> <tr><td>第 8 回</td><td>学習支援・発達支援（アセスメントの方法）</td></tr> <tr><td>第 9 回</td><td>不登校・いじめの理解</td></tr> <tr><td>第 10 回</td><td>不登校・いじめの理解（事例検討）</td></tr> <tr><td>第 11 回</td><td>学校における危機対応</td></tr> <tr><td>第 12 回</td><td>学校における危機対応（事例検討）</td></tr> <tr><td>第 13 回</td><td>校内・校外連携、コンサルテーション（他職種連携）</td></tr> <tr><td>第 14 回</td><td>保護者との連携</td></tr> <tr><td>第 15 回</td><td>まとめ</td></tr> </table>		第 1 回	オリエンテーション・スクールカウンセラー制度について	第 2 回	スクールカウンセリングの枠組み	第 3 回	子どもの発達課題の理解	第 4 回	3段階の心理教育的援助サービスと心理教育	第 5 回	発達障害の理解	第 6 回	発達障害児童生徒・保護者への支援	第 7 回	特別支援教育（通常学級と特別支援学級、通級による指導）	第 8 回	学習支援・発達支援（アセスメントの方法）	第 9 回	不登校・いじめの理解	第 10 回	不登校・いじめの理解（事例検討）	第 11 回	学校における危機対応	第 12 回	学校における危機対応（事例検討）	第 13 回	校内・校外連携、コンサルテーション（他職種連携）	第 14 回	保護者との連携	第 15 回	まとめ
第 1 回	オリエンテーション・スクールカウンセラー制度について																															
第 2 回	スクールカウンセリングの枠組み																															
第 3 回	子どもの発達課題の理解																															
第 4 回	3段階の心理教育的援助サービスと心理教育																															
第 5 回	発達障害の理解																															
第 6 回	発達障害児童生徒・保護者への支援																															
第 7 回	特別支援教育（通常学級と特別支援学級、通級による指導）																															
第 8 回	学習支援・発達支援（アセスメントの方法）																															
第 9 回	不登校・いじめの理解																															
第 10 回	不登校・いじめの理解（事例検討）																															
第 11 回	学校における危機対応																															
第 12 回	学校における危機対応（事例検討）																															
第 13 回	校内・校外連携、コンサルテーション（他職種連携）																															
第 14 回	保護者との連携																															
第 15 回	まとめ																															
事前学習の内容 学習上の注意	配布資料や参考文献等を読んでおくこと																															
本科目の 関連科目	人格心理学特論																															
テキスト	授業内で資料を配布する																															
参考文献	<p>松本真理子・永田雅子・野呂健二編著 心の発達支援シリーズ1-6 明石書店 2016</p> <p>窪田由紀・平石賢二編 心の専門家養成講座⑦ 学校心理臨床実践 ナカニシヤ出版 2018</p> <p>村瀬嘉代子監修 学校が求めるスクールカウンセラー 遠見書房 2013</p> <p>福岡県臨床心理士会編 学校コミュニティへの緊急支援の手引き 金剛出版 2005</p>																															
成績評価 方法と基準	授業態度、討論への参加、レポート等の平常点を総合して評価する（100%）。全体で60%以上を合格とする。																															

科目名	社会心理学特論 (家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践)	2単位
担当者	吉野真紀、辻野達也、石川佳奈 非常勤教員)	
テーマ	家族関係、集団、地域社会に焦点を当てた心理支援の理論と方法について学び、実践に活かす。	
科目のねらい	<p><キーワード> 家族支援、児童虐待、多職種連携、緊急支援、ジェンダー・セクシュアリティの多様性</p> <p><内容の要約> 家族関係等に焦点を当てた心理支援の理論と方法、地域社会や集団に働きかける心理学的援助、さらに社会的な課題である被災地支援やジェンダー・セクシュアリティの心理に関する相談や臨床実践の応用について学び、包括的に理解する。</p> <p><学習目標> 現代の家族をめぐる課題について理論・実践の両面から包括的に理解できる。 緊急支援および被災地支援の実践における知識とスキルと態度を理解できる。 社会問題について開かれた多様な視点で心理支援を考えることができる。</p>	
授業の進め方	第1回 オリエンテーション/家族・家族心理学とは 第2回 現代の家族・親子関係をめぐる様々な課題 第3回 家族療法の諸理論と技法 第4回 地域社会支援：コミュニティ心理学とは 第5回 医療・保育領域における家族支援 第6-7回 学校における緊急支援 第8-10回 被災地における支援 第11-12回 リワークやデイケアから広がる家族・地域・社会支援 第13-14回 ジェンダー・セクシュアリティの多様性における家族・地域・社会支援 第15回 まとめ	
事前学習の内容・学習上の注意	○本授業は、3名の教員によるオムニバス形式で進める。 ○各教員のパートごとに、課題を設定する。 ○ディスカッション等に主体的に取り組み、心理学的な洞察を深めてもらいたい。	
本科目の関連科目	臨床心理学特論、産業・組織心理学特論、心の健康教育特論、など	
テキスト	テキストは使用しない、適宜レジュメを使用する	
参考文献	柏木恵子 編著『よくわかる家族心理学』ミネルヴァ書房 (2010) 日本家族心理学会 編『家族心理学ハンドブック』金子書房 (2019) 植村勝彦・高島克子・箕口雅博・原裕視・久田満 編『よくわかるコミュニティ心理学 (第3版)』 (2017) 福岡県臨床心理士会 編『学校コミュニティにおける緊急支援の手引き (第3版)』金剛出版 (2020) 松浦直己 編著『被災地の子どもたちのケア』中央法規出版 (2018) 前田正治・松本和紀・八木淳子 編著『東日本大震災とこころのケア』日本評論社 (2021) 針間克己・平田俊明 編著『セクシュアル・マイノリティへの心理的支援』岩崎学術出版 (2014) 康純 編著『性別に違和感がある子どもたち トランスジェンダー・SOGI・性の多様性』合同出版 (2017)	
成績評価方法と基準	評価方法は、授業への参加度や課題等への取り組み姿勢 (主体的・積極的) 70%、レポート 30%で評価し、総合評価 60点以上を合格とする。なお、2/3以上の出席がない場合は評価の対象とならない。	

科目名	犯罪心理および被害者支援特論（司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開） [今年から毎年開講]	2単位
担当者	山田 麻紗子（非常勤教員）	
テーマ	司法における非行や犯罪の理解と立直り支援および犯罪被害者支援の展開	
科目のねらい	<p><キーワード> 司法の法的枠組み 非行・犯罪の面接調査技術 児童虐待 犯罪被害者支援の展開 司法分野の心理職</p> <p><内容の要約> 本講義では①司法における関連法や関連機関、②心理臨床・社会的な視点から非行・犯罪の背景要因やそこに至る経過等から事件の真相を理解する。また、立直り支援に役立つ専門的な知識・技術等の取得ができるよう事例を交えて理解を深める。更に、犯罪の当事者としての加害者が抱える被害性に視点を当て、被害と加害の一体性、被害者支援の法制度と心理的支援の実際について学習する。海外の被害者支援等についても紹介する。</p> <p><学習目標> ・非行と犯罪の違い、少年・刑事司法の理念や手続きの流れとその相違、冤罪の生じる背景、裁判員裁判など実務経験を通じた専門的知識を広く学ぶことができる。 ・非行・犯罪の一背景要因である児童虐待について学ぶことで、心理臨床に福祉的視点を加味した理解や支援の大切さが理解できる。 ・司法分野で働く心理職の仕事とその特徴について学ぶことができる。 ・犯罪被害者の支援のための法制度、被害者の理解と支援について理解できる。</p>	
授業の進め方	第 1 回 犯罪・非行心理学への招待（ガイダンス）：司法の法的枠組み、少年法の理念、関係機関の役割機能と連携 第 2 回 犯罪・非行心理学の基礎(1)：犯罪・少年非行の推移と現況、課題 第 3 回 犯罪・非行心理学の基礎(2)：非行・犯罪心理学の主な理論 第 4 回 犯罪・非行心理学の基礎(3)：犯罪・非行の背景要因となる児童虐待 第 5 回 犯罪・非行心理学の基礎(4)：非行・犯罪の面接調査技術 第 6 回 前半のまとめ（質疑応答） 第 7 回 犯罪被害者支援の歴史と展開 第 8 回 海外における児童虐待防止・予防および性的被害児・者支援の実際 第 9 回 体罰を受けた障害児の被害状況 第 10 回 加害と被害の心理（事例から学ぶ） 第 11 回 事例から心理臨床的立直り支援の実際を学ぶ 第 12 回 ゲスト講師を予定（弁護士の付添人活動、あるいは障害児・者の支援） 第 13 回 取り調べの心理学と裁判員裁判の基礎 第 14 回 事例を通して取り調べの心理、冤罪の背景を学ぶ 第 15 回 全体の振り返りとまとめ（公認心理師試験の問題を解く） *ゲスト講師の日程は今後交渉するため、授業順序に変更の可能性がある。	
事前学習の内容 学習上の注意	② レジメ内で参考文献を示すので、2, 3冊は読むこと。 ②毎回授業で出て来る専門用語の意味等を復習し、理解すること。 ③新聞を読み、少年非行や成人犯罪の動向、現代社会を広く知るよう心がけること。 ④毎回の授業終了時に、次回講義の案内をしますので可能な予習をすること。	
本科目の関連科目	発達臨床心理学特論 社会心理学特論 精神医学特論 ソーシャルワーク論など	
テキスト	テキストの代わりにレジメを毎回配布する。	
参考文献	授業内で紹介する。	
成績評価 方法と基準	レポート（70点）、授業・ディスカッションへの参加度（30点）の方法で評価を行い、全体で60点以上を合格とする。	

科目名	産業・組織心理学特論 (産業・労働分野に関する理論と支援の展開)	2単位
担当者	三宅 美樹	
テーマ	産業・組織心理学の理論と産業・労働分野の支援	
科目のねらい	<p><キーワード> 産業・組織心理学、個人と組織、こころの健康、産業精神保健、産業・組織心理臨床</p> <p><内容の要約> 心理専門職として産業・労働分野で活動する上で、産業・組織心理学の理論および基礎的な知識を習得し、心理的支援の実践について考える力を、事例検討を通して養うことを目標とする。</p> <p><学習目標> 産業・労働分野における機能と他分野との違いを理解することができる。 個人(従業員)と組織(会社)の健康度の見立てができる。 組織の中での自分の役割を把握した上で必要な介入を検討できるようになる。</p>	
授業の進め方	第1回 イン트로ダクション(産業・労働分野の全体像の把握と理解) 第2回 産業・労働分野における労働関連法規 第3回 産業・組織心理学①(産業・組織心理学とは) 第4回 産業・組織心理学②(キャリア発達、キャリア開発) 第5回 産業・組織心理学③(ワークモチベーションと組織コミットメント) 第6回 産業・組織心理学④(リーダーシップとフォロアーシップ) 第7回 産業・組織心理学⑤(職場の人間関係、ハラスメント) 第8回 産業・組織心理学⑥(職業性ストレスとこころの健康) 第9回 産業・組織心理学⑨(作業と安全衛生、労働災害、危機介入) 第10回 産業・組織心理学⑩(事例を通して組織をアセスメント) 第11回 産業精神保健(ダイバーシティと働き方改革) 第12回 障害をもつ労働者への支援 第13回 職場復帰支援 第14回 ストレスチェック制度(一次予防と組織分析) 第15回 ディスカッション, まとめ	
事前学習の内容・学習上の注意	次回の授業範囲を予習し、専門用語の意味等を理解しておくこと。 授業は担当者による講義と質疑応答、受講者による発表、事例検討、積極的なディスカッションで学びを進める。	
本科目の関連科目	臨床心理学特論、精神医学特論	
テキスト	「産業・組織心理学 - 個人と組織の心理学的支援のために」 加藤容子・三宅美樹(編著) ミネルヴァ書房	
参考文献	「よくわかる産業・組織心理学」山口裕幸・金井篤子(編) ミネルヴァ書房 「心理職の組織への関わり方 - 産業心理臨床モデルの構築に向けて」新田泰生・足立智明(編) 誠信書房 「産業心理臨床実践 - 個人と職場・組織を支援する」金井篤子(編) ナカニシヤ出版	
成績評価方法と基準	ディスカッションへの参加度(40%)、課題レポート(60%)とする。	

科目名	精神医学特論（保健医療分野に関する理論と支援の展開）	2 単位
担当者	小川しおり	
テーマ	精神疾患や発達障害の知識を習得し、心理的支援の実践につなげる	
科目のねらい	<p><キーワード> 精神医学、診断基準、生物・心理・社会モデル（バイオサイコソーシャルモデル）、発達障害、摂食障害、心理教育</p> <p><内容の要約> 主な精神疾患について、症状・経過・診断・治療の基本的なことがらを解説し、臨床現場での適切な心理・社会的な対応の工夫について学ぶ。今日の社会におけるメンタルヘルスの課題や展望について議論し、文献や事例を通して考察を深める。</p> <p><学習目標> * 各精神疾患の心理学的特徴を把握し、その知識を心理療法的アプローチに応用することができる * 保健医療分野において他職種と専門的連携をおこなうことができる</p>	
授業の進め方	第 1 回 精神疾患の総論、法と制度 第 2 回 精神疾患の薬物療法 第 3 回 精神疾患の心理社会的治療 第 4 回 精神科リハビリテーション 第 5 回 児童思春期の精神疾患 第 6 回 児童思春期の入院治療 第 7 回 発達障害（1） 第 8 回 発達障害（2） 第 9 回 摂食障害（1） 第 10 回 摂食障害（2） 第 11 回 身体症状症 第 12 回 コンサルテーションリエゾン精神医学 第 13 回 不安症 第 14 回 論文の抄読・発表および討論（1） 第 15 回 論文の抄読・発表および討論（2）	
事前学習の内容 学習上の注意	日頃から授業で取り上げる内容と関連する最近の話題に関心を持ち、書籍等で自発的に探究し基礎知識を養っておくことを求める。 講義内容の予習および授業中の配布資料の復習をする。第14回・15回については討議用の論文を配布するので読んでおくこと。	
本科目の関連科目	臨床心理実習Ⅰ、教育臨床心理学特論、発達臨床心理学特論、精神保健福祉論、など	
テキスト	とくに指定しない	
参考文献	「こころの医学入門」近藤直司・田中康雄・本田秀夫編集 中央法規出版 「標準精神医学 第8版」尾崎紀夫・三村将・水野雅文・村井俊哉編集 医学書院 「面接技術の習得法」木村宏之著 金剛出版	
成績評価 方法と基準	コメントカード（60点）、ディスカッションへの参加度（20点）、プレゼンテーション・発表資料（20点）により評価し、総合評価をおこない、60点以上を合格とする。	

科目名	発達臨床心理学特論（福祉分野に関する理論と支援の展開）	2単位
担当者	永田 雅子（非常勤教員）、堀 美和子	
テーマ	生涯にわたる発達とその支援	
科目のねらい	<p><キーワード> 乳幼児期の発達、障害の理解、生涯発達、心理支援</p> <p><内容の要約> 第1回～第9回：DVD や事例を利用しながら、胎児期より成人期までの発達を丁寧におい、グループでのディスカッションも行うことで、より深く理解してもらう。また可能であれば、受講日前に、新生児～就学前までの子どもの姿を1時間切り取って観察したレポートを用意してもらいたい。観察場所は、家庭、保育園、幼稚園など被観察児となる保護者の許可がとれればその場所は問わない。お願いする場合には、「実習のために、ある一人の1時間の様子を観察させてほしい」と依頼し、自分から関わることはなく、適度な距離を保って、その子どもの姿を逐語的に記録をしてきてほしい。1時間の観察でA4サイズで2～3枚程度の分量になるはずである。</p> <p>第10回～第15回：講師による講義、DVD や文献をもとにディスカッションを行い、理解を深める。なお、受講者や討論に合わせて内容を変更することがある。</p> <p><学習目標> 人の生涯にわたる発達に関する今日的な課題を理解するとともに、発達の理論および発達に影響を及ぼす要因について理解することができる。特に、①乳幼児期の関係性の発達を理解し、②障害児と家族についての見立てと支援計画を立てること、③障害を抱える人や高齢期の問題を理解し、心理支援を計画することができる。</p>	
授業の進め方	<p>4日間の集中講義として実施する。授業の進行によって休憩時間や講義時間が前後するため、注意をすること。</p> <p>1日目 第1回 赤ちゃんの誕生-親となるということ 第2回 新生児期～乳児期の発達 第3回 関係性の発達 第4回 乳幼児観察の検討</p> <p>2日目 第5回 幼児期～児童期の発達 第6・7回 虐待と愛着関係の発達の阻害 第8・9回 家族としての育ちを支援する</p> <p>3日目 第10回 生涯発達における発達課題とその支援 第11回 高齢期の問題とその支援</p> <p>4日目 第12・13回 障害を持つ人の理解と支援 第14・15回 発達障害の子どもの理解と支援</p> <p>毎回の授業終了時に、コメントカードに記載を求め、出席確認とする。</p>	
事前学習の内容 学習上の注意	<p>○可能であれば、1時間の乳幼児観察のレポートを準備すること</p> <p>○乳幼児期の発達のプロセス（どの時期に何ができるようになるのか）について、発達検査等で確認しておくこと。</p> <p>○配布資料や参考文献等を授業内でも提示するので読んでおくこと。</p>	
本科目の関連科目	臨床心理学特論、精神医学特論、精神保健福祉論	
テキスト	なし。資料は当日配布する	
参考文献	<p>小此木啓吾,小島謙四郎,渡辺久子編, 乳幼児観察の方法論 岩崎学術出版 1994</p> <p>永田雅子編著 別冊発達 32 妊娠・出産・子育てをめぐるこころのケア ミネルヴァ書房 2016</p> <p>永田雅子・野村あすか編 福祉心理臨床実践 ナカニシヤ出版 2016</p> <p>田中道治・都筑学・別府哲・小島道生編 発達障害のある子どもの自己を育てる ナカニシヤ出版 2007</p>	
成績評価 方法と基準	コメントカードの提示（20%）、ディスカッションへの参加度（20%）、提出レポートまたは発表（60%）で評価をおこない、全体で60%以上を合格とする。	

科目名	投映法特論	2単位
担当者	早川すみ江	
テーマ	投映法検査の中のロールシャッハ・テストとバウムテストについて、事例をもとに討論を通して、分析・解釈の理解を深める。	
科目のねらい	<p><キーワード> 投映法検査, テストバッテリー, 臨床心理査定, 精神力動的理解, パーソナリティ</p> <p><内容の要約> 投映法検査は、質問紙法や作業検査法に並び、パーソナリティを査定する上で優れた技法である。他の検査法に比べ個別的で、より詳しくパーソナリティを査定することが可能な分、その技法を習得するのは容易ではない。 本講座では、投映法検査の中でも、特にロールシャッハ・テストの分析・解釈ができるようになることを目的とする。ロールシャッハ・テストから、被験者のパーソナリティを査定し、その結果を援助に役立てる方法を身に付けていくことを目指す。またテストバッテリーについて理解し、ロールシャッハ・テストとバウムテストから、被験者のパーソナリティを立体的に描くことができるようにする。</p> <p><学習目標> ・投映法検査であるロールシャッハ・テストの分析に必要な専門的知識および技法を習得し、適切な解釈をすることができる。 ・ロールシャッハ・テストとバウムテストを通して、クライアントの抱える心理的問題を含めたパーソナリティを見立て、心理ならびに近接領域の専門家に説明することができ、援助に活かすことができる。 ・投映法検査を実施する上での倫理的諸問題を理解することができる。</p>	
授業の進め方	<p>1年次の「臨床心理査定演習Ⅱ」の課題として実施した投映法検査（ロールシャッハ・テスト及びバウムテスト）データを、各自が分析・解釈をして発表し、討論することを通して、実際の分析・解釈の方法を身に付けていく。</p> <p>第1回：オリエンテーション（発表の仕方） 第2～3回：ロールシャッハ・テストの解釈の実際例 第4～14回：事例発表と討論 第15回：まとめ</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・「臨床心理査定演習Ⅱ」の課題として実施したロールシャッハ・テストは、授業のはじめまでに、スコアリング・結果の整理・形式分析までしておくこと。 ・「臨床心理査定演習Ⅱ」で取りあげた文献『精神力動論』で学んだことをもとに、継起分析と総合解釈を行い、発表の準備をすること。 	
本科目の関連科目	臨床心理査定演習Ⅰ・Ⅱ	
テキスト	<ul style="list-style-type: none"> ・『精神力動論』小此木啓吾・馬場禮子著 金子書房（事務室より各自に貸し出しますので、購入の必要はありません） ・『改訂 新・心理診断法』片口安史著 金子書房（希望者には、事務室より貸し出します） 	
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・馬場禮子著「ロールシャッハ法と精神分析」岩崎学術出版社 ・馬場禮子著「境界例 ロールシャッハ・テストと心理療法」岩崎学術出版社 ・ジェームズ・H・クレーガー著「思考活動の障害とロールシャッハ法」創元社 ・加藤志ほ子著「ロールシャッハ・テストの所見の書き方」岩崎学術出版 	
成績評価方法と基準	発表レポート（70%）・討論への参加度（30%）により評価し、全体で60%以上を合格とする。	

科目名	心理療法特論	2単位
担当者	福元 理英、小松原 智子、辻野 達也	
テーマ	遊戯療法、認知・行動療法、芸術（表現）療法	
科目のねらい	<p><キーワード> 遊戯療法、イメージを媒介とする心理療法、治療構造、芸術療法</p> <p><内容の要約> ①遊戯療法の導入と展開について、講義と事例検討を通して学ぶ。プレイセラピーにおける治療契約、終了時と開始時の工夫、遊びを通じた対話やアセスメントについて検討する。</p> <p>②認知行動療法の基本的な枠組みと支援の視点を、実践や事例を通して学ぶ。また、セルフケアや健康的な自己表現など、健康的・予防的な観点への活用について学ぶ。</p> <p>③芸術療法やイメージを媒介とする技法がもたらす治癒促進的な働きと禁忌について、講義と実習により経験的に学ぶ。それぞれの手法がもつ性質を理解することで、臨床状況（場所、対象、経過など）に応じた適用上の工夫や配慮ができるよう、実習、具体的場面の想定、事例の提示を通じて詳細に解説する。</p> <p><学習目標> ①遊戯療法の事例検討を通して、枠組みやケース経過について理解を深めることができる。</p> <p>②認知行動療法の概念を理解し、対人支援やセルフケアに応用することができる。</p> <p>③芸術療法、イメージを媒介とする心理療法がもつ性質と治癒機序を経験的に理解し、心理療法全般に応用することができる。意識と無意識及びクライアントとセラピストの相互交流過程に関わりながら、同時にそれを客観的内省的に捉えることができる</p>	
授業の進め方	第1回 : オリエンテーション・プレイセラピーの概要 第2・3回 : グループワーク 第4・5回 : プレイセラピーの枠組み・事例検討 第6・7回 : 認知行動療法の理論の変遷と基本知識の概説、 健康的な認知的理解と自己表現（認知変容、アサーティブな表現） 第8・9回 : セルフマネジメント 第10回 : 事例検討 第11・12回 : 芸術療法（コラージュ療法） 第13・14回 : イメージを媒介とする心理療法（夢分析） 第15回 : イメージを媒介とする心理療法（ウォッチワード・テクニク）	
事前学習の内容 学習上の注意	・理解を深めるため、事前学習や作業課題を提示することがある。 ・実習的授業内容については、授業への出席が心理的負担とならないような配慮を行う。	
本科目の 関連科目	臨床心理面接特論Ⅰ・Ⅱ、臨床心理基礎実習、臨床心理学特論、臨床心理実習Ⅰ - ①②	
テキスト	授業での紹介文献、および配布資料。	
参考文献	領域が多岐に及ぶため、適宜授業で紹介する。 田中千穂子『プレイセラピーへの手びき 関係の綾をどう読みとるか』日本評論社、2011 ゲリー・L・ランドレス著 山中康裕監訳『プレイセラピー 関係性の営み』日本評論社、2007 下山晴彦『認知行動療法を学ぶ』金剛出版、2011 坂野雄二監修『60のケースから学ぶ認知行動療法』北大路書房、2012 やまだようこ編『この世とあの世のイメージー描画のフォーク心理学』新曜社、2010 杉浦京子『コラージュ療法』川島書店、1994 河合俊雄編著『ユング派心理療法』創元社、2013 マイケル・ダニエルズ著 老松克博訳『「私」をみつける心理テスト～ウォッチワード・テクニクの世界』創元社、2000	
成績評価 方法と基準	ディスカッションへの参加（40%）、課題への取り組み（30%）、提出レポート（30%）により評価し、総合評価60点以上を合格とする。	

□社会福祉関係選択推奨科目

科目名	ソーシャルワーク論	2単位
担当者	田中 千枝子(非常勤教員)	
テーマ	ソーシャルワークを理論や方法論として、事例検討やロールプレイなどの実践を通じて理解する	
科目のねらい	<p><キーワード> ①ソーシャルワーク ②実践理論 ③社会福祉方法論 ④マイクロ・メゾ・マクロ実践 ⑤ 専門性</p> <p><内容の要約> ソーシャルワーク実践の基盤となる考え方や方法を示すソーシャルワーク実践理論やアプローチの基本的知識と支援観(倫理観)を得ることによって、とくにマイクロからメゾレベルの領域のソーシャルワークの専門性の確認を行う。また実践事例を分析し、グループワークにより、コミュニケーションをはかる体験をすることで、ソーシャルワークの価値にもとづく知識・技術を検証し、さらにそれらを専門家のコンピテンスとして身につけるための集団学習およびセルフワークによる学修を行う。 方法としては、実際の事例に対して様々な教育手法により実践理論・アプローチを適用し、参加型授業によって、個人・集団・地域の一定の視点からの多様な事例の事実を観察し、理解し、分析・解釈し、評価するといった段階を経て、ソーシャルワーク実践の一連の流れを体験する。</p> <p><学習目標> 人の人生/生活に着目し、社会的枠組みにおいて福祉的課題を設定し、その科学的視点を身に着けることによって、ソーシャルワークの実践方法を理解し、組織・地域・制度に対して働きかけることができる。ソーシャルワーク理論や展開過程を問題解決に応用する能力として技能や表現を身につけ、多職種に対するコミュニケーションやプレゼンテーション等のマネジメントに役立てることができる。</p>	
授業の進め方	<p>第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 SWの実践理論概論講義 第 3 回 援助観価値観の理論的変遷、事例による討論 第 4 回 統合理論の流れの概観、事例検討 第 5 回 バイオ・サイコ・ソーシャルモデル、ロールプレイ 第 6 回 エコシステム理論と時間:空間 エコマップとタイムライン作成 第 7 回 ピンカスミナハンの4つのシステム論、地域における多職種連携を意識したエコマップ作成、組織・地域 第 8 回 GWに関する基礎理論概観、チームアプローチ協働の型 ロールプレイ 第 9 回 グループ力動論、司会の技術 事例検討、ロールプレイ KJ 法によるグループワーク 第 10回 グループワークのロールプレイ 課題に対するプレゼンテーション 第 11回 場の理論、地域福祉と評価手法 第 12回 エンパワメントエバリュエーション法、ワークショップのロールプレイ 第 13回 ソーシャルワークリサーチ、社会調査、介入計画作成 第 14回 ミクロ・メゾ・マクロに展開するソーシャルワークとマネジメント、レポート 第 15回 グループ発表 まとめ レポート作成</p>	
事前学習の内容 学習上の注意	<p>○指定したテキストや資料や課題を事前に読んで学習し考えておくこと。 ○ディスカッションやロールプレイなど演習形式を多用するので、積極的に参加すること。 ○毎回授業の最初に前回授業内容に係る振り返りを実施するので、復習しておくこと。 ○毎回の授業終了時に、次回の資料や論文を配布するので読んでおくこと。 ○社会福祉学での基礎的な理論に関する知識を確認しつつ講義する。</p>	
本科目の 関連科目	医療・福祉マネジメント研究科「専門演習Ⅰ・Ⅱ」の考え方や論文作成の枠組み作成に寄与することができる。なお本科目は「認定社会福祉士」の資格対象科目として認定されている。	
テキスト	相澤譲治 監修『新版・ソーシャルワークの理論と方法Ⅰ【基礎編】』みらい 2021年	
参考文献	渡部律子『福祉専門職のための統合的・多面的アセスメント』ミネルヴァ書房 2020年 ブトゥリム,Z『ソーシャルワークとは何か』川島書店 1986年 その他 授業中に提示	
成績評価 方法と基準	授業2限に1回ごとのセルフワークによる課題の提出(20%) ディスカッション・ロールプレイへの参加度(20%)、 1日ごと課題レポート3回提出(60%)の方法で評価をおこない、全体で60%以上を合格とする	

科目名	精神保健福祉論(隔年開講科目、2023 年度開講)	2単位
担当者	大谷 京子	
テーマ	精神保健福祉領域における実践、現状と課題	
科目のねらい	<p><キーワード> 精神保健福祉、 ソーシャルワーク、 地域生活支援、 実践理論、 障害者福祉の理念</p> <p><内容の要約> 精神障害が日本の歴史の中でいかに扱われてきたかを概観し、それが現状にどのような影響を落としているかを学ぶ。またソーシャルワーク実践の基礎となる理念、理論についても議論する。その上で、精神障害者の不利益を知り、生活支援のあり方を検討する。 事例を題材としながら、精神障害者に対するサポートの現状と課題を検討したい。</p> <p><学習目標> ①日本の精神保健福祉の現状と課題を説明できる。 ②障害の概念・障害者福祉の基本理念を理解する。 ③精神保健福祉に関連するテーマについて、議論し、まとめ、プレゼンテーションできる。</p>	
授業の進め方	第1回 オリエンテーション / 第2回 精神障害者の生活実態 第3回 精神障害者家族の置かれている状況 第4回 障害概念の変遷1 / 第5回 障害概念の変遷2 第6回 障害の社会モデルの考え方/ 第7回 精神障害者の権利擁護 第8回 ソーシャルワーク実践が依拠する理念と理論 第9回 エンパワメントとパターナリズム 第10回 チームアプローチ 第11回 精神障害者地域生活支援の事例検討 第12回 地域精神保健福祉活動の方法 第13-14回 受講者によるプレゼンテーションおよびディスカッション 第15回 まとめ	
事前学習の内容 学習上の注意	<input type="checkbox"/> プレゼンテーションについて 後半の授業で、精神保健福祉の現状と課題について、グループで10分程度のプレゼンテーションをしていただきます。たとえば「いかに効果的にチームアプローチを展開できるか」、「精神障害者に対する偏見をなくすためには」など、テーマは自由です。2時間ほど、グループでの検討時間を授業時間内に提供しますが、それだけでは足りませんので、授業時間外での準備が必要になります。 <input type="checkbox"/> 初回授業の時に、あらかじめ参考文献の中から1冊を読んでレポートを提出してください。 日本の精神保健福祉がたどった特殊な歴史と現状を踏まえ、その原因は何かについて考察してください。タイトルは自由です。A4用紙に40文字×40行で1600文字以内です。	
本科目の 関連科目		
テキスト	テキストは利用せず、プリントなど資料を用意する。	
参考文献	芹沢一也(2005)『狂気と犯罪 なぜ日本は世界一の精神病国家になったのか』講談社。 岡崎伸郎(2020)『精神保健医療のゆくえー制度とその周辺』日本評論社。 大熊一夫(2009)『精神病院を捨てたイタリア捨てない日本』岩波書店。 ヒーザー・スチュアート(2015)『パラダイム・ロスト』中央法規出版。	
成績評価 方法と基準	レポート(40%)、プレゼンテーション(30%)、コメントカードの提示(30%)によって評価をおこない、全体で60%以上を合格とする。	

科目名	福祉サービスマネジメント概論	2単位
担当者	篠田 道子	
テーマ	保健・医療・福祉サービスのマネジメント(管理・運営・人材育成)を考える	
科目のねらい	<p><キーワード> 保健・医療・福祉サービス、 マネジメント、 ミドルマネジャー、意思決定支援、多職種連携 地域包括ケアシステム、リスクマネジメント</p> <p><内容の要約> 少子高齢化や情報化社会の進行とともに、福祉サービス、組織やチーム、リーダーシップのあり方が変化している。本講ではミドルマネジャーという視点から福祉サービスのマネジメント(管理・運営・経営)を考える。本科目における「福祉」とは、保健・医療・福祉・リハビリ・介護を包括した広義のものである。講義、ディスカッション、グループワーク、ワークショップなど複数の方法を組み合わせる。授業では様々な保健・医療・福祉サービスの場面にスポットを当て、自分がその場面の当事者であればどのように状況を理解し、そしてどのように意思決定し、組織やサービスを動かしていくのかを考える。授業は意思決定と思考訓練の場でもあり、理論的知識と実践的な知見の双方の向上を目指す。また、わが国における福祉サービスを多面的かつ相対的に検討するため、国際比較も随時取り入れていく。</p> <p><学習目標> ・広義の福祉サービスのマネジメントを理解する。 ・意思決定と思考訓練を重ね、適切な解決策を見つけ、グループ内での合意を形成できる。</p>	
授業の進め方	<p>本講義は、隔週2コマ連続とする。</p> <p>第 1・2 回 オリエンテーション、自己紹介、問題提起 多職種連携を高めるカンファレンス(ブレインストーミング、ケース教材による討論)</p> <p>第 3・4 回 福祉サービスにおける組織変革(ケース教材による討論)</p> <p>第 5・6 回 多職種で支える意思決定支援-終末期ケアに焦点を当てて-</p> <p>第 7・8 回 地域包括ケアシステムとネットワーク形成(院生による事例提供と討論)</p> <p>第9・10 回 医療・福祉サービスの国際比較</p> <p>第11・12 回 高齢者施設における新型コロナのリスクマネジメント</p> <p>第13・14 回 静かなリーダーシップ(グループワーク+発表)</p> <p>第15 回 全体のまとめ</p> <p>※都合により、授業の内容と順番を一部変更することがあります。</p>	
事前学習の内容 学習上の注意	<p>・事前に配布したケース教材を読み、課題シートに自分の考えをまとめ、グループワークで発言できるように準備しておくこと。</p> <p>・地域包括ケアシステムの概要、取り組み状況、評価等について、事前に調べておくこと。</p>	
本科目の 関連科目	保健・医療・福祉サービス論	
テキスト	テキストは使用しない。レジュメ、ケース教材、実践報告書、雑誌論文、新聞記事など多様な教材を使う。	
参考文献	<p>・篠田道子(2011)『多職種連携を高めるチームマネジメントの知識とスキル』(医学書院)</p> <p>・篠田道子他編集(2018)『多職種で支える終末期ケア-医療・福祉連携の実践と研究』(中央法規)</p> <p>・J.バダラッコ、高木晴夫監修(2010)『静かなリーダーシップ』(翔泳社)</p>	
成績評価 方法と基準	最終レポート(50点)、②平常点(50点):コメントカード、事前課題、グループワークへの参加状況等で評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。最終レポート:テーマは、授業で扱う内容に関連するものを各自でテーマ設定する。A4版で 2000 字程度にまとめる。締め切りは 2023 年 7 月 29 日(土)までに、大学院事務室が指定する提出 BOX に提出すること(締め切り厳守)。	

□公認心理師資格必修科目

<p>科目名</p>	<p>臨床心理実習Ⅰ－⑤（心理実践実習）</p>	<p>2単位</p>
<p>担当者</p>	<p>小松原智子・辻野 達也・福元 理英 瀬地山葉矢*・小川しおり*・早川すみ江*・堀美和子*・千賀則史*・吉野真紀* *巡回指導担当</p>	
<p>テーマ</p>	<p>学外施設での実習を通じて、心理臨床活動の実際的な知識と技術を学ぶ。</p>	
<p>科目のねらい</p>	<p><キーワード> 学外実習、心理職業務の実際、心理的支援、他職種連携と地域支援、職業倫理と法的義務</p> <p><内容の要約> 学外実習（学外施設での実習）と事前・事後の学習を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、心理的支援の実際について理解を深め、支援を実践していく力を養う。学外施設では実習先の指導担当者および大学の実習担当教員（各実習施設の指導を担当する巡回指導教員）による指導のもとに実務を体験し、実践を通じて心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務などを学ぶ。</p> <p><学習目標> ・心理臨床とその近接領域に関する専門知識および基礎となる対人関係能力をふまえて、さまざまな臨床場面、多様な対象に適切に臨むことができる。 ・心理臨床の実務を体験し、心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務について理解することができる。</p>	
<p>授業の進め方</p>	<p>【授業】 授業については、臨床心理実習Ⅰ－④内で行うものとする。</p> <p>【学外実習】 <実習期間・内容> ・臨床心理実習Ⅰ－③、④の実習に加えて、更に学外実習施設における実習を希望する者に対して行う。公認心理師資格を受験する場合は必修科目である。 ・原則1箇所、実習施設ごとに指定された日程で、10日間（毎週の継続、または連続した日程・1日6時間程度）の実習を行う。 ・実習生は、支援に必要な知識・技能の基礎的な理解の上に、（ア）から（オ）の事項について、見学だけでなく、心理に関する支援を要する者等に対して支援を実践しながら、実習指導者又は実習担当教員（巡回指導教員）による指導を受けて修得していく。</p> <p>（ア）心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援等の知識及び技能の修得 （イ）心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成 （ウ）心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ （エ）多職種連携及び地域連携 （オ）臨床心理士及び公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解</p> <p><実習準備・実習指導> ・実習先が決まった実習生は、「実習の手引き」（授業内で配布）を熟読し、事前準備や実習計画書の作成を行い、実習担当教員（巡回指導教員）から、学外施設への実習事前訪問に関する打ち合わせや指導を受ける。 ・実習生は、学外実習施設の実習指導者および実習担当教員と、事前訪問による打ち合わせ（実習オリエンテーション）や施設見学を行う。 ・実習期間中は、学外実習施設の実習指導者の指導を受けて施設実習を行い、実習報告を毎回作成すると同時に、実習担当教員による実習指導や施設での訪問指導を受ける。訪問指導は10日間の実習の場合、5回につき1回、計2回受ける。</p>	

	<p><参考></p> <p>公認心理師の資格取得を目指す場合には、以下の実習時間が必要とされる。2年間で原則、下記の領域および時間数を行うものとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学外施設での担当ケースに関する実習の時間は90時間以上とする（なお、学内実習と合わせた担当ケースの実習時間数は270時間以上とする）。 ・実習施設は、保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の5分野うち、医療機関は必須とし、3分野以上の施設において実習を受けることが望ましい。医療機関以外の施設においては、見学を中心とする実習も含む。
事前学習の内容 学習上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・学外実習は原則毎週の継続、または連続した日程で行うこと ・各実習先に必要な基礎知識や心理検査技法を事前に勉強しておくこと
本科目の関連科目	臨床心理実習Ⅰ－②、臨床心理実習Ⅰ－③、④
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・津川律子・橘玲子編『臨床心理士をめざす大学院生のための精神科実習ガイド』誠信書房、2022 ・津川律子・篠竹利和『シナリオで学ぶ医療現場の臨床心理検査』誠信書房、2010 ・鑪幹八郎・名島潤慈『心理臨床家の手引[第4版]』誠信書房2018 ・滝川一廣『子どものための精神医学』医学書院、2017 ・一般社団法人日本公認心理師養成機関連盟編『公認心理師養成の実習ガイド』日本評論社、2019 ・東畑開人『居るのはつらいよーケアとセラピーについての覚書』医学書院、2019 ・窪田彰『精神科デイケアの始め方・進め方』、2004 ・窪田彰編『多機能型精神科診療所による地域づくり チームアプローチによる包括的ケアシステム』、2016 ・日本精神科病院協会監修 岸本年史編著『精神科研修ハンドブック』2005 海馬書房 ・笠原嘉著『予診・初診・初期治療 精神科選書Ⅰ』2007 星和書店 ・全国情緒障害児短期治療施設協議会編『心をはぐくむⅢ－総合環境療法の臨床－』2002 ・森田喜治『児童養護施設と被虐待児－施設内心理療法家からの提言』創元社 2006 ・橋本和明『虐待と非行臨床』創元社 2004 ・黒田美保著『これからの発達障害のアセスメント：支援の一步となるために』、金子書房、2015
成績評価 方法と基準	<p>以下のAの項目が達成されていることを条件とし、Bの各項目について評価して総合評価60点以上を合格とする。</p> <p>A：①事前・事後の授業での発表、②1箇所10日程度での施設での実習</p> <p>B：①事前学習による実習施設の理解、事前準備や打ち合わせでの積極的調整。②心理的支援の基本的態度・知識・技術の修得。多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務等についての理解。</p> <p>③実習態度（社会性・責任感・主体性・協調性・関係づくりなど）。④実習日誌等の実習記録の適切な整備。⑤実習報告書の内容と発表、実習体験の振り返りと自己の課題の理解</p>

科目名	心の健康教育特論（心の健康教育に関する理論と実践） 〔隔年開講（予定）、2023 年度開講〕	2 単位
担当者	小松原智子	
テーマ	心の健康に関する知識の普及方法や情報提供の方法について、体験的に学ぶ	
科目のねらい	<p><キーワード> 心の健康、ストレスマネジメント、心理教育、家族への支援</p> <p><内容の要約> 心の健康に関する知識の普及を図るための教育および情報の提供を行うにあたり、一般の方々にわかりやすくかつ有益な伝え方について、実際にプレゼンテーションを行いながら、実践的に学ぶ。また、心理的に問題を抱える本人やその家族にその対応を伝える心理教育について、その意義や方法を学ぶ。</p> <p><学習目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・心の健康教育のために必要な知識を理解し、平易に説明することができる ・心の健康教育に関するプログラムを提案し、実践することができる ・当事者やその家族等を支援するための心理教育に必要な視点を理解できる 	
授業の進め方	<p>「心の健康」に必要な知識を学ぶとともに、領域ごとに必要な工夫のために諸原則を学ぶ。心理的負荷の把握や適応の視点、コミュニケーション、自己理解・表現、感情のコントロールの工夫など、ワークやディスカッションを取り入れ、体験的に理解を深める。さらに、事例を用いてディスカッションを行うことで理解を深める。また、授業で学んだ知識をもとに、それぞれが領域に合わせた心の健康教育ができるよう予防プログラムの作成、実践を行う。</p> <p>第 1・2 回 オリエンテーションー「心の健康」とは 第 3～5 回 セルフケア、ストレス対処法、自己表現 第 6～8 回 心の健康教育の領域毎の工夫 第 9・10 回 家族支援、支援者支援の視点 第 11～14 回 心理教育プログラム実践 第 15 回 まとめ</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<p>参考文献に挙げた図書、関連法令・通達を自習すること。 プレゼンテーションのための資料は、発展的学習として、個々に専門文献を調べて作成すること。また、提示の際には、その出典を明確にしながら用いること。</p>	
本科目の関連科目	臨床心理面接特論Ⅰ・Ⅱ、精神医学特論、教育臨床心理学特論、犯罪心理および被害者支援特論、産業・労働心理学特論	
テキスト	使用しない。適宜レジュメを配布する。	
参考文献	<p>平木典子『アサーション入門：自分も相手も大切に自己表現法』講談社現代新書、2012 平木典子『凶解相手の気持ちをきちんと「聞く」技術：会話が続く、上手なコミュニケーションができる!』PHP 研究所、2013 日本睡眠学会教育委員会『不眠症に対する認知行動療法マニュアル』金剛出版、2020 ロナルド T.ポッターエフロン、パトリシア S.ポッターエフロン著/藤野京子監訳『アンガーマネジメント 11 の方法：怒りを上手に解消しよう』金剛出版、2016 島津明人編著『職場のストレスマネジメント：セルフケア教育の企画・実施マニュアル』誠信書房、2014 久田満・飯田敏晴編『心の健康教育』金子書房、2021</p>	
成績評価方法と基準	評価方法は課題レポート・発表（60%）、授業での討論の参加など取り組み姿勢（40%）で評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。なお、2/3 以上の出席がない場合は評価の対象とならない。	

□研究指導科目

科目名	心理臨床研究演習Ⅰ、心理臨床研究演習Ⅱ	1年次後期 2単位 2年次 4単位
担当者	小川しおり・瀬地山 葉矢・早川 すみ江・堀 美和子・吉野 真紀・千賀則史	
科目のねらい	<p><内容の要約> 心理臨床研究演習Ⅰ・Ⅱは、修士論文研究を通して、臨床心理学に関する研究を遂行する力を養い、複雑な事象を深く理解し、その知見を他者に伝える力を高めることを目的とする。</p> <p><学習目標> 研究を遂行し、知見を他者に伝えることができる</p>	
授業の進め方	<p>授業は修士論文研究指導を柱に、1年次後期から、指導教員による個別またはグループでの指導が行われる。</p> <p><指導教員の決定> 1年次6月ごろ、院生の指導教員希望を確認する。そのため、院生には、指導教員の専門分野についてオリエンテーションを行ない、「修士論文指導に関わる専門分野一覧表」および「研究者要覧」を配布し、指導教員についての理解に遺漏がないように工夫する。1年次9月に院生の希望と教員の専門領域をもとに、指導教員が決定される。</p> <p><指導の進め方> 1年次後期、2年次は、指導教員が修士論文研究および論文執筆について、各院生の問題意識や課題について、指導を行う。その際、研究の主体は院生であり、積極的な姿勢で研究に取り組み、必要に応じて、指導を求める姿勢が必要とされる。 指導内容や進め方は、各指導教員によって異なるが、1年後期以降の修士論文に関するスケジュールに沿って、指導が行われるので、以下にスケジュールを示す。</p> <p style="text-align: center;">1年次06月： 修士論文中間報告会（M2）（心理学研究法特論） 1年次09月： 小論文①提出 1年次10月： 修士論文中間報告会 1年次12月： 修士論文報告会（M2） 1年次02月： 小論文②提出 1年次03月： 合同修士論文発表会 2年次04月： 修士論文計画書提出 2年次06月： 修士論文中間報告会 2年次09月： 小論文③提出 2年次10月： 修士論文中間報告会（M1） 2年次12月： 修士論文第1次提出 修士論文報告会 2年次01月： 修士論文最終提出 修士学位授与最終審査（口頭試問）</p> <p>なお、「修士論文」には、「一般の修士論文」と「課題研究論文」がある。「一般の修士論文」は、臨床心理学分野の実証研究、実践研究などである。先行研究の検討、体系的な論考、明確な結論の導出などを重視する。「課題研究論文」は、臨床心理学分野の事例研究論文である。2年間を通じて3つの事例研究と、3つの研究の「要約と結論」のすべてを提出することにより、「修士論文」として認定する。</p>	
事前学習の内容 学習上の注意	修士論文中間報告会（6月、10月）、修士論文報告会（12月）、合同修士論文発表会（3月）に参加すること。	
本科目の関連科目	心理学研究法特論	
テキスト	各指導教員の指示による。	
参考文献	各指導教員の指示による。	
成績評価 方法と基準	<p>心理臨床研究演習Ⅰは、小論文①の提出、修士論文中間報告会での報告および個別の指導状況により評価を行い、60点以上を合格とする。</p> <p>心理臨床研究演習Ⅱは、小論文②③の提出、修士論文第1次提出および最終提出、修士論文中間報告会および修士論文報告会での報告を評価の前提条件とし、修士学位授与最終提出（口頭試問）の結果により評価を行い、60点以上を合格とする。</p>	